

---

# 白銀の挽歌

かなづきみこと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白銀の挽歌

### 【Nコード】

N8842J

### 【作者名】

かなづきみこと

### 【あらすじ】

666匹の存在してはいけない魔物「闇魔」が世界に放たれた。

彼らを在るべき場所に還す「闇狩主」の役目を担う少女・汀。

汀をサポートする「護り人」兼ツッコミ兼幼馴染の禅箭。

2本の尾を持つ謎の狼・都。

彼女達の戦いが終わるのはいつの日か。

## ブローグ

風が吹き抜けてゆく。

時に行く手を遮り、時には背を押し。

冷たく吹き荒ぶもの。

それが・・・朔風。

我、朔風の中、白銀の中に集いて闇を狩る者也。



少女の前に舞い降りた、口の周りを血で紅く染めた一匹の獣が、鋭い眼光を放ち、無残に落とされた首を見下ろす。

2本の尾を持つ狼。

彼女を護る様に立つその姿は、鬼神さえ感じさせるほどの殺気が感じられた。

コイツの余裕は、これだったのだろうか。

ヨコウ…？

いや、それは違う。

それなら、何故、この少女は泣いている？

恐怖ではなく、哀悼の涙。

自分が殺されるという事は全く考えず、ただただ相手に対しての憐み。

ゆっくりと足を進め、最期の痙攣をしている身体に近づく。

涙は頬を伝っている。

しかし、地面に落ちることはなかった。

冷たいものが、生気を失いかけた顔に当たる。

…雪……？

それは一瞬にして液体と化し、己の身体と共に溶けてゆく。ゆっくりと。しかし確実に。

痛みも苦しみもない。あるのは「消えてゆく」という感覚だけ。

「消えるんじゃないの…帰るんだよ…」

少女が初めて口を開く。

芯に澄み渡る、綺麗な声。

微かに残っていた恐怖も、憎悪も、一緒に消えていくように思えた。「ごめんね…」

彼女の中から発せられた光が、首と身体を吸収するようにその場所から消し去った。

\*\*\*\*\*

『まだ詰めが甘いですよ、ぜんや禅箭』

二尾の狼が、少年を睨みつける。

「悪かったな。まだまだ力不足で」

禅箭と呼ばれた少年が不貞腐れたまま歩み寄る。

彼女はまだ放心状態のままである。

「…ホラ、帰るぞ、汀」

「うん…」

腕を掴まれ、支えられてようやく汀が立ち上がる。

「禅ちゃん」

「何だよ」

「…疲れたあ…」

予想以上の体力を消耗したのか、へたりと再び座り込む。それを半ば無理矢理引き起こして、禅箭がボソリと呟く。

「俺の方が疲れてるよ」

「ロツテリアのフアンタ飲みたい」

「買えばいいだろ」

「ひとりじゃつまんない。一緒に行こうよ」

「…俺、もう帰って寝たいんだけど」

「じゃあ、持ち帰りにするから禅ちゃん家で飲もうよ」

「炭酸抜けちまうから却下。第一、俺ん家まで行ったら終電なくなっちまうだろ」

「その時は泊まれればいいだけでしょ？」

「……………ドアホ！ジジイに殺されるわっ！！」

「だって留守でしょ？」

「……………」

だからだよ。

現在、一人暮らしも同然な部屋に女を泊めるなんて真似、できるはずがない。

少しでもその手の要素を含んでいるなら構わないのだが、コイツの場合は全く邪気が無いので始末が悪い。

自分を男として意識するとかそういうものではなく、子供の感覚のままなのだ。

よって、この少女のオツムの中に「主従関係」などという単語は存在しない。

…自分は、汀に仕える身。

必要以上に馴れ合うことはできない。

という「肩書き」。あくまでも。

実際は、ガキの頃から知っているため、そんな堅苦しい感覚は持てそうになかった。

それでも…。

『帰りましょう、汀。送りますよ』

二尾の狼が優しい瞳をして見上げる。

「うん…」

禅ちゃんのばーか、と小さく呟き、汀は帰路についた。

「バカはどっちだよ」

『両方ですよ』

禅箭の悪態に、足元にいる都が冷たいツツコミを入れる。

「…言うようになったじゃねーか、都」

聞こえない振りをするかのように、2本の尾をゆらゆらさせながら都は黙って汀の後についていった。

「そつだ、禅ちゃん。言い忘れてたけど、明日リーダーの小テストあるよ」

30m程離れた場所で足を止めた汀が言った。

「……」

「それじゃ、おやすみ」

踵を返し、再び歩き始めようとした瞬間、

「…やっぱ、寄ってくか」

禅箭が汀の肩を抱いた。というか、しっかり掴んだ。

「やっぱりノート取ってなかったんだ…」

「授業中は俺の貴重な睡眠時間だからな」

『夜も忙しいのは認めますがね』

「うつせい」

都のツツコミにこれ以上悩まされたくないので、無理矢理話を止まらせた。

暗闇の中に潜み暮らす、更なる闇。

封印から解き放たれた、闇に身を委ねる存在。

- - - - -闇魔。

それらを狩り、再び封印の地に施錠の楔をつける者。

魔物たちは、様々な意を籠めて、こう呼ぶ。

- - - - -「闇狩主」と…。

当の本人に、その自覚は全くなかったりする。



## 1話

いけないで。

つれていつて。

おいていけないで。

もう、ひとりはいや。

いやなの。

おねがいだから。

- - - アタシヲ、トメテ。

このままだと、きっと、あなたをころしてしまうから。

\*\*\*\*\*

静まり返っていた教室の中に、スパコーンという渴いた音が響いた。

「毎回毎回、よくそんなに眠れるなあ、常盤<sup>ときわ</sup>」

教師の声と女子のクスクスという笑い声が入り混じって、禅箭の鼓膜を刺激した。

「…睡眠学習」

瞼を開こうともせずに禅箭が応える。

「確かにお前の成績は悪くはない。ただし、それは古文と歴史と地

学だけだろ」

「将来のために必要な知識しか頭に入れる気ないんで」

「…寺だつてな、これからの時代には英語も必要だぞ」

「うち神社」

「ごたくはいらん」

もう一回、今度はもう少し齒切れよく「スパーン」と響いた。

ちなみに叩いたモノは、丸められた教科書である。ある意味お約束。それでも起きようとしなかった彼は、イロイロな意味で大物かもしれない。

「やつほーお」

職員室で散々叱られて教室に帰ってきた禅箭を、甲高い声が出迎えた。

「何だ、先に帰つてなかったのか」

汀の姿に少し驚いたが、気にせず帰り支度を始めた。

「都来てないんだもん」

「は？」

彼女の意外な台詞に、思わず窓際に行き、校門を見る。

確かにいない。

いつもだったら、汀の護衛を勤めるべく、終業時間には必ず来ているのに。

都の姿は、普通の人間には見えない。見る事が出来るのは、ごく一部の人間と、魔物の類だけである。

校内には一応、禅箭が結界を張り巡らせてある。そこらへんの雑魚程度では触れることすら出来ない。

それを知っているから、彼女は禅箭が戻ってくるまで待っていたのだ。

自分一人で歩いていると、魔物の類を呼び寄せてしまうことを知っていたから。

禅箭が都が傍に居れば、何らかの対応はできるから。

「…ってことは、俺が今日お前を送るんだな」

「イヤならいいよ。一人で帰るから」

「そうもいかねえよ。湊に頼まれてるからな」

「頼まれてなかったら…こんなことしてくれないの？」

「何か言ったか？」

「…別に」

「禅サマあ！」

校門の通過した瞬間、二人の後頭部を女性の声が直撃した。

「ひどいですわ禅サマってば、いらっしやるのがわかってるのに  
入れないなんて、こんな仕打ちをなさるなんて、

幾ら雉<sup>きしね</sup>祢<sup>ね</sup>がいぢめられるのが好きとは言っても、あまりにも酷過ぎ  
ますう~~~~っつっ!!」

「雉祢っ!？」

女性の顔を見て、禅箭の表情が変わる。

「そうですわ禅サマ 何年ぶりでしょうか……この日を待ち望んで  
おりました」

汀はきよんとしたまま、事の成り行きを見ていた。

数十秒後、我に返ったらしく、首をぶんぶんと振った。

「…禅ちゃん」

そのヒト、誰？

喉まで出掛った台詞を飲み込もうとする。

それに気づいた禅箭が、汀を自分の傍に引き寄せた。

「禅サマ、その娘は誰ですの？」

明らかな嫌悪を剥き出しにして、雉祢が問う。

「お互いのため、聞かないほうが幸せだと思うけど」

「……どういうこと？」

「……………」

禅箭は答えなかった。

「…まあ良いですわ。皇<sup>み</sup>様<sup>さま</sup>は留守なのでしょう?今夜改めてお伺い

いたしますので、よろしくお願いいたしますわ」

沈黙を破ったのは、雉祢。

「ちよつと待てよ。…何でジジイが留守なの知ってるんだよ」

「それは今夜のお楽しみですわ」

につこりと微笑み、雉祢は踵を返して夕暮れの薄闇の中に消えていった。

「…相変わらず自分勝手な女だな……」

ふうつと大きな溜息をつく。

「禅ちゃん…」

汀が不安そうな顔をして禅箭を見上げる。

「…あとで、時間がある時に教えてやるよ」

全てを見越したように禅箭が汀の頭をポン、と軽く叩く。

今はまだ教えられない。そういう意味だった。

「珍しいな、お前が家に来るなんて」

「止むを得ず、だけどな」

出されたお茶を喉に流し込んで禅箭が言う。

「まあそう言うなよ。俺と会つのも久しぶりだろ」

汀とよく似た笑顔で、左目に包帯を巻いた青年・湊が腰を下ろす。みなと

外見は禅箭とあまり変わらないように見えるが、彼はれっきとした

汀のく兄であり、現役の大学生。

5つ上である。

「あれから…目の調子はどうなんだ？」

包帯にチラリと視線を移して、禅箭が訊く。

「変化無し。体調も別段悪くはない」

「そう」

良かった。と言えるのだろうか。

今はそう思っしかない。

拭いきれない不安はあるけれど。

5年前。

禅箭がまだ汀に再会していなかった頃。

湊は、閻魔から汀を庇って、片目を失った。

その時の傷が元で。

――正確には、片目を閻魔に奪われた所為で。

彼は、そのまま成長しない身体になった。

自らの身体に閻魔を閉じ込めて。

妹の命を代償に。

彼の右の瞳は人間のもの。

そして左の瞳は、閻に住む魔物のものとなっているのだった。

その事実を知っているのは禅箭と都、そして禅箭の祖父のみ。

汀は、何も知らない。

ただただ自分を責めて。

半ば強引に一人暮らしを始めた兄を追って『身の回りの世話』とか

いうこれまた強引な大義名分のもと、転校までして。

まあ、それがあつたから禅箭と会えたとも言えるが。

結果オーライ……ということなのだろうか。

それとも、これも運命だったのだろうか。

「相変わらず後先考えない兄妹だよなあ……」

禅箭が呟く。

「何か言ったか？」

「別に」

「お待たせ」

残ったお茶を飲み干そうとした禅箭の背中を、突然汀が押した。  
当然のことながら、咽る。

「てめえ……わざとだろ……」

ティッシュで床を拭きながら、禅箭が睨む。

「別に」。……湊ちゃん、今から禅ちゃん家に行つて来るね」

「ああ。あまり遅くなるなよ」

「…ちょっと待て。誰が来いって言った!？」

「行くもん」

「だからあ…」

「痴話喧嘩は禅箭ん家でやれ。俺はこれからレポートやらなくちゃならないから、行くならとっとと行って来いよ」

台詞の途中で見事に湊に遮られ、ほぼ追い出されるかのように二人はマンションから出た。

「じゃ、行つてきまーす」

汀は何気にも機嫌だ。

こいつ、絶対都のこと忘れてる。

「あ、ちよつと待った」

玄関から見送りをしていた湊が声を掛ける。

「なに？」

「お前じゃない、禅箭」

数メートル進んでいた禅箭を、こいこいと手を招く。

「何だよ」

「わかつてるだろうけど」

そつと耳打ちする。

「襲うなよ」

…こつという時の湊の目は、本気で怖い。

「…大丈夫だって」

保証はできないが。

\*\*\*\*\*

常盤神社。

一般人では、地元の人間くらいしか知らないが、実はそのテの業界では、かなり有名な処である。

日本はおろか、世界でもその評価は高く、それ故に主である禅箭の祖父はいつもどこかしら飛びまわっていて留守だった。

一年の半分を日本で過ごせばいい方かと。

その為、代理である禅箭は大抵忙しかった。

勿論、祖父からありとあらゆる教育はされてきたが、一人でどうこうできる問題ではないものもあるわけで。

学生であると同時に神社経営者代理であり、神主代理。

そして夜は例の方向の仕事。

祖父の代理の仕事も勿論あるが、最近では「常盤の後継ぎ」としても評価も高まっているらしく、彼自身に依頼する人間も増えてきていた。

喜ばしいことではあるのだが、あまり嬉しくは無い。

――睡眠時間が足りない。

「だからって、授業中いつも寝てたらダメだよ。先生可哀相じゃない」

バスの吊革に掴まってうとうとしている禅箭を、叱咤する。

「……俺の昨夜の仕事からの帰宅時間、教えてやろうか」

「……3時くらい？」

「帰ってきたのが5時半だ。流石に朝日が眩しかったぜ」

虚ろな目で禅箭が窓の外の風景を見つめていた。

「うわ。……朝帰りだね」

汀がコロコロ笑う。

いや、間違いではないが。その表現は誤解を招きそうでちょっと怖い。

『次は常盤坂前、常盤坂前』

バスがアナウンスを告げる。

禅箭は無言のまま、停車ブザーを押した。

数分後、バスの停留所前には二人だけが残った。

「……前から聞きたかったんだけど、どうしてこっつて『常盤坂』っ

ていうの？地名は違うよね」

「うちの敷地内だから」

禅箭がさらりと答える。

「……………」

「どうした？」

「……ここから、結構歩くよね……………」

「そうでもないだろ。坂道があるからそう感じるだけだ。それに、  
うちが普通の家より広いのは当然だろ」

「そうだけどさあ……………」

坂道の途中には、所々に狼をモチーフにした石像が置かれている。  
今となつては絶滅したと云われている蝦夷狼。

北海道の開拓の犠牲となつた多くの動物達。

ここは、それらを奉っている、数少ない場所でもあつた。

そして、最後の石像。

鳥居の真下にあつたそれは粉々に砕け散っている。

ここから、都が目覚めた。

「どこに行っちゃったんだろうね、都」

欠片をひとつ手に取り、汀が呟く。

戻っているような気配は感じられなかった。

「さあな」

玄関に貼っておいた札を一枚剥がして、鍵を開けながら禅箭がぶつ  
きらばうに返事する。

待ち構えていたかのように、電話のベルが鳴る。

それを思いつきり無視して、禅箭はまっすぐ、2階の突き当たりに  
ある自分の部屋へと向かった。

「電話鳴ってるよ」

これでもかというくらい鳴り続けるベルに、汀が耳を塞いだ。

「あつちはジジイ宛ての電話だから無視。そのうち止まるからほつ  
とけ」

「留守番電話にしないの？」



「黒電話にそんなもの求めるな。第一、留守電なんかしたら件数あつというまにオーバーする」

「なるほど。……何してるの？」

ベッドに潜り込もうとしている禅箭に気づいて、汀が聞いた。

「見ればわかるだろ。俺は寝る。適当にゲームでもやって遊んでろ」  
布団をばふつと被ると、そのまま彼はいともあつさりと眠りについてしまった。

「え~~~~~~~~っつっ!」

当然のことながら、抗議する。しかし、既に彼の耳には通らなかった。

…………ヒマだ。

汀はゲームにはあまり興味が無い。

部屋の中を探索してみたが、これといって面白そうなものも見つからない。

だからといって、外に出ることもできない。

都が居れば、外出もできたのだが。

(…………つまんない)

雑沓の事が気になって、何とか聞き出そうとして着いて来たのに。

当の本人はスウスウと静かな寝息をたてていた。

鼻でもつまんでやろうかと思ったが、疲れているのが解っているの  
でちょっかいは出さなかった。

自分がもつとしっかりしていれば、禅箭や都の負担はずっと減るはずなのに。

一人での外出もできるのに。

いつの間にか、電話のベルの音も消えていた。

- - - - - 静かだ。

約2時間後。

禅箭が目を覚ました。

（そろそろ雉祢が来るな…）

上体を起こして、ベッドから降りようとしたとき、「何か」にぶつかった。

「……………」

いつの間に布団に潜り込んできたのか。

汀が隣で気持ちよさそうに眠っていた。

（ちよつとまでーっ！！）

全然気づかなかった自分にも問題があるが、この場合、どう見ても誤解を招く構図である。

禅箭の部屋だし、禅箭のベッドだし。

しかも都いないし。

「……………むに……………」

どんな夢を見ているのか。汀はふにやっとした笑顔をして眠り続けている。

あまりにも無防備な寝顔に、ドキリとする。

（ヤバイって…………）

折角、襲わないように彼なりに気を使って寝たのに、全てパアである。

「……………」

沈黙。

「……………ふう」

やがて、沈黙は大きな溜息へと変わった。

（仕方ねえなあ…………）

ここまで無防備にされていると、反って手は出しにくい。

下手に今手を出したりしたら、後が怖い。

湊や祖父や都に責められるよりも、汀に嫌われることの方が怖い。

フツと笑うと、未だ眠っている汀の前髪を撫ぜ、その額にそつとくちづけた。

これくらいは役得ってことで。

そして、彼女を起こさないようにそつとベッドから降りようとした

瞬間。

勢いよくドアが開き、一人の人物が入ってきた。

「こんばんわ、禅さまっ！！雉祢が参りましたわーっ」

「げ」

部屋に二人きり。しかもベッドの上で、禅箭が汀を押し倒しているとも見えるような構図。

あまりにもタイミングが悪すぎた。せめてあと数秒後であつたならば、禅箭はベッドから降りていたのに。

雉祢の表情がみるうちに変化する。

満面の笑顔は想像を絶するような顔に。

腰まで伸びている美しい黒髪は一瞬にして天を仰ごうかというくらい逆立ち。

大きな瞳からはそれに負けないほどの大粒の涙を溢れさせ。

そして、悲鳴にも似た叫び。

「禅サマ、何しているんですのー！ー！っ！ー！！！！！！！」

禅箭の部屋の窓にピシッとヒビが入った。

汀が仰天して目を覚ます。

「なっ、なに…っ？」

「禅サマ、雉祢は納得できませんっ！説明してくださいましっ、説明っ！！貴女も貴女ですわっ！殿方の寢床に入り込んで、しかも、しかも禅サマの……！！！！」

「落ち着け雉祢、これには理由が…」

禅箭がベッドから飛び降り、弁解しようとする。

「あんまりですわああああー！ー！ー！ー！ー！ー！っ！ー！！！！」

説明を求めておきながら、全く聞こうともせず、雉祢はその場に泣き崩れた。

汀はまだ何が起こったのかわかっていない。

それから雉祢を説得するのに、およそ2時間を要した。

「そういう事でしたの……」

ようやく事態を把握した雉祢が、ハンカチで口元を拭った。

「その娘が闇狩主だったのですね……」

「ああ」

弁論に疲れきった禅箭が答える。

「……それで、お前の用事ってのは何なんだよ」

「ああ、そうです、忘れる所でしたわ」

ハツと思い出したように、雉祢がポケットから布袋を取り出し、中から小さな氷の粒を取り出した。

「一週間くらい前、見つけましたの。かなり疲れていて、昨日やっと治りましたの」

「……！！こいつ……」

「何これ？」

雉祢の手のひらを、汀が禅箭の後ろから覗き込む。

それは、氷の筈なのに解ける様子は無く、やがて意思を持ったかのようにコロコロと動き出した。

「解」

禅箭がその上に右手を翳し、小さく呟く。

それに呼応するかのように、氷の粒が膨らんでゆく。空気を交えて、ふんわりした氷の結晶に。

そして誰もが知っている形に。

「雪だるま？」

汀が驚嘆の声を上げる。

目と口と眉毛が付き。

どこから取り出したのかシルクハットとネクタイを付けて。手のひらサイズの「雪だるま」が、ちよこんと三人の前に姿を現した。

「やつぱり『カゲロウくん』か……」

禅箭が溜息をつく。

「今日の午後、歩いていた都に見せたら、血相変えて走っていつてしまつて。学校に禅サマがいるから、そちらに届けてくれと。で、参りましたの」

ニコニコしながら雉祢が言う。

「お前…そういうことは始めに言えよ…」

がつくりと肩を落とす。コイツがいるとわかっていれば、都がいなくなつたのも納得いくのだ。

「禅ちゃん…このコ、何なの？」

話に付いていけていなかった汀が、禅箭に訊く。

「ああ、お前はまだ知らなかったな。…コイツはカゲロウくんって言つて…うちのジジイの式神」

「式神？」

「使いつ走りみたいなものだ」

禅箭が手を出すと、カゲロウくんはトコトコと彼の手の上に乗つてきた。

何かを認識するようにしばらくウロウロすると、ちょこんと座り、いきなり話し始めた。

「久しぶりだな禅箭。なつちゃんも元気か？16日の18：45に千歳に着くから迎えヨロシク！」

「すーちゃんの声だ」

汀がカゲロウくんの顔を見ながら言う。

「オイ…16日つて、今日じゃねえか…」

これ以上ないくらいの脱力。

時計を見ると、既に9時。

伝言を伝え終えたカゲロウくんは、無表情で何故か踊っていた。

「ただいま」

玄関を開ける音と、深い声がした。

「ジジイ！」

「すーちゃん！」

「皇様！」

三人三様の呼び方で出迎える。

「おお、随分と賑やかな出迎えだな」

常盤神社の主。

禅箭の祖父であり、保護者。

そして、世界を股にかけるほどの実力を持った「常盤」の一族の現・長。

常盤皇。

約半年振りの帰国であり、帰省だった。

## 2話

『…申し訳ありません、突然だった故、連絡もせずに行ってしまった』

皇の影から姿を現した都が、申し訳無さそうに頭を下げた。

「いや、それは雉祢に聞いたから問題なかったけどな」

実際は、全て終わってから聞いたのだが、それは敢えて言う必要もないので黙っておいた。

「コイツが全部悪いんだし。疲れるような式神<sup>シキ</sup>を使うから連絡遅れるんだろ」

「カゲロウくんは多機能&高性能なんだぞ。多少疲れるくらい目を瞑れ」

カゲロウくんを呪符に戻して皇が反論する。

「…疲れる事はまあ何とか苦しいながらも理解してやるよ。……で、その疲れるような多機能で高性能なシキをどこから飛ばしたんだ？」

「チュニス港」

「…一発、いや三発殴らせろ」

「ダメだよ禅ちゃん、すーちゃん殴っちゃ」

「ですわ、禅サマ」

殴りかかろうとした禅箭を、汀と雉祢が止めた。

『…しかし、今回ばかりは、禅箭に同感ですね……』

都がらしくない台詞を溜息と共に吐き出す。

実際、一番被害を被ったのは都であった。

「大変だったんだぞお、街中じゃ都に荷物持たせられなかったからな」

普通の人間から見れば、荷物が宙に浮いている状態になってしまうため、都に荷物を持たせることはできず、殆どの道程を一人で膨大な量の荷物を持ってくる羽目になったのだった。

「自業自得だろ」

冷たく突き放す。

「それがたった一人のお祖父ちゃんに言う台詞か」

「たった一人の孫を年がら年中ほったらかしにしてる奴に言われたくないね」

とうとう切れたらしく、勢いよく立ち上がると、バンと大きな音を立てて扉を閉め、禅箭は自分の部屋に戻っていつてしまった。

「相変わらず短気だなあ、あいつ」

皇が苦笑した。

「禅サマ……」

雉祢がそつと部屋の戸を開ける。

中は電気も点けず、真っ暗だった。

ベッドが盛り上がりつているのが、暗闇に慣れた頃、気づいた。

「眠ってしまったんですの…?」

「……………」

返事は無かった。しかし、眠っている様子もなかった。

「…以前、会った頃を思い出しますわね。あの時も皇様に反抗して

…」

ベッドの端に腰を下ろして、雉祢が優しく微笑む。

「久しぶりにお会いできて本当は嬉しいでしょう。意地は張らないほうが良いですよ」

「…意地とか、そんなんじゃねえよ」

呟くような、独り言のような返事が返ってくる。

別に皇が家を留守にするのは茶飯事な事で。

いつもフラリと出かけて、数ヶ月帰ってこないようなこともしばしばで。

そしてひょつこりと帰ってきたりして。

8年前、両親を事故で失って、何がだかよくわからないうちにここに連れてこられて。

その一週間後に突然一人きりにさせられたりして。



一人きりにさせられる恐怖に怯えて。

置いていかれる淋しさを幾度となく体験して。  
何度となく皇を恨んで。

…それでも、帰ってくる嬉しくて。  
でも、憎んでいて。

どうしたら良いのか、自分でもよくわからないのだ。

「…あの頃、お前に会ってなかったら今頃こうしていなかったらろ  
うな」

「禅サマ……」

雉祢が、そつと禅箭の上に覆い被さる。

「雉祢は、お傍におりますわ。これからは、お望みならばこの生命  
の続く限りお世話させていただきますわ」  
優しく、子供を宥める様な口調で寄り添った。

「……今夜は、このへんでお暇しますわね」

数秒の間をおいて、雉祢はそつと部屋から出て行った。

「おやすみなさいませ…禅サマ」

「…すーちゃん、どうしてあの人に禅ちゃんの部屋に行かせたの？」  
土産の菓子をつまみながら汀が聞いた。

「何となく…かな。そんな膨れっ面しなさんな。折角の美人が台無  
しだぞ」

ポンポンと汀の頭を撫でながら皇が言った。

「…あの人って、禅ちゃんとうどういう関係なの？」

まだ少し頬を膨らませて第二の質問。  
皇と都が無言で目を合わせる。

「説明に難しいよなあ……」

『禅箭からは聞いていないのですか？』

「後で…としか言われてない」

「説明には及びませんわ」

物音一つ立てずに雉祢が汀の背後に現れる。

「禅サマは私の全て。…それだけですから。そろそろお暇させていただきますわね」

汀に一瞥をくれ、雉祢は黙って玄関に向かった。

「あつ…私もそろそろ帰らなくちゃ。湊ちゃん心配する」

『送ります』

慌てて帰り支度をする汀の後を都が追った。

「あつ、じゃあこれ湊くんに渡しておいてくれ。土産」

「ありがと。……何でうなぎパイ？」

手渡された包みを見て一瞬固まる。

「無性に食べたくなつてな。ちよっと回り道して買って帰ってきた」

「………わかった。ありがと。じゃ、おやすみなさい」

「はいはい」

「…禅ちゃんにも、おやすみなさいって言っておいてね」

「わかつてるよ」

パタパタと足音が遠ざかってゆくのを、皇は笑顔ですっと見送っていた。

姿が完全に見えなくなった頃、

「さてと」

腰を軽く叩いて、ゆつくりと奥の部屋に足を進めた。

「禅」

扉をノックしようとした刹那、中から扉が開いた。

「…下で茶でも飲むか？」

禅箭は黙ったまま頷いた。

「今度は…いつ出かけるんだよ」

羊羹を一切れ口にほおりこんで、禅箭が聞く。

「予定まだ組んでないからなあ…。まあ、一ヶ月くらいはここにいるだろうな」

「珍しい」

いつもだつたら早ければ翌日、遅くても2週間後には再び出かけているのに。

「少し調べたいことがあってな。……お前のことも暫くご無沙汰だったからな。…明日からしごくからな」

「やなこつた」

「とりあえず明日は函館にでも行つてくるか」

「…聞けよ人の話」

「あと、22日には横浜行くからな。あけておけよ」

「…学校あるんだけど」

「サボれサボれ」

「それが仮にも保護者の台詞か？」

「おうよ」

こいつは絶対、子供に学校休ませて遊園地に遊びに行くような親だつたに違いない。

\*\*\*\*\*

「結局、だれも教えてくれなかったあな……」

汀はまだ不貞腐れている。

隣では、都がばつが悪そうに、視線を合わせないように歩いていた。

『仕方ないですよ…彼女のことはやはり私からは何とも…』

「都まで庇うんだ、あの人のこと」

汀が冷ややかな瞳で一瞥をくれる。

『詳しくは知らない、ということですよ』

逃げるように歩くペースを早める。が、ふと、何かを思い立ったように足を止めた。

『汀…もしかして、嫉妬しているのですか？』

真つ直ぐな瞳で、二尾の狼が少女を見据える。

「そんなんじゃないもん」

間髪を入れずに否定する。

ただ、二人の関係が気になるだけ。

世間一般では、それを「好奇心」若しくは「嫉妬」と呼ぶ。

汀の感情がどちらかとは言い難い。

「……………」

鳥居を過ぎた辺りで、周りの木々がざわりと動いた。

汀と都が、ほぼ同時に足を止める。

風の縫い目を弄るように、木々が唸る。

若葉が数枚、風に散らされ、空に吸い込まれてゆく。

何かの気配を察したのか、都が低く身構えた。

闇に紛れるものとは違った、異質な気配。

――闇魔の、気配だ。

それは突如、上から現れた。

『！？』

都が気付いた時は遅かった。

ゆうに2メートルはあるだろうという巨大な鴉が、急降下してきていた。

完全に不意を突かれた都が、攻撃をまともにくらう。あつという間に数メートル飛ばされ、身体を巨木に叩きつけられた。

邪魔者を退かした鴉が、標的を汀に絞る。

<結界の異変を感じたから来てみれば…とんだ獲物が見つかったものだ>

鴉がククク、とまるで笑っているかのような声をあげる。

『汀……早く、結界の中へ…っ！』

ふらつきながら都が叫ぶ。

汀は動かなかった。いや、動けなかった。

汀が、体内にある「封魔の氷鏡」を使うには、数秒の時間を要する。そしてその数秒の間、彼女はトランス状態に陥るため、完全に無防備になってしまうのだった。

今、その状態になれば確実に捕まる。かといって、動こうとしても

隙を見せずに移動することは今の彼女には困難なことだ。

それがわかつているから、動けなかった。

結界の境界線である鳥居までは、約10メートル。たったそれだけの距離が、今では何よりも遠く感じる。

< ついているな... >

鴉がゆつくりと、一步一步汀に近づいてゆく。

( 禅ちゃんっ……!! )

汀の身長を軽く超える巨大な鳥が、彼女を威嚇するようにはばたく。カシカシと、嘴を鳴らす。

彼女がこの場から逃げる術は、完全に塞がれた。

ガキン、と嘴が空を切る音が響いた。

威嚇ではない。汀に襲い掛かったのは確かだった。しかし、当の彼女は彼の鋭い武器から逃れている。

間一髪で、彼女を結界の中に突き飛ばした影があった。

「え……？」

突き飛ばされたときに掠り傷は少し出来たものの、汀は殆ど無傷だった。

そして彼女の代わりに巨大な鴉の前に立塞がったのは、一匹の動物だった。

見た目としては、猫に似ている。しかしそれと呼ぶには似つかわしくない大きさをしていた。

全身は黒く、すらりと伸びた肢体。長い尾はぴんと天を仰ぎ、大きな瞳は真っ直ぐに鴉を見据えていた。

< ……何故、何故貴様がここにっ……!! >

攻撃目標を捕らえ損ね、僅かにバランスを崩した鴉の台詞は、後半を聞くことができなかった。

鮮血が、いつの間に空けられたのか、胸の風穴と嘴から吐き出された。

あっけなく鴉の身体は崩れ落ちる。嘴からはヒューヒューと微かな

呼吸が繰り返されている。

じきにそれも止まる。それに気づいた汀は、慌てて「鏡」を取り出した。

一滴の体液も残さないまま、闇に還される。

それを見届けてから、黒猫はそつと身体を翻した。

「雉祢……ちゃん………？」

汀の台詞に、進みかけた足がぴたりと止まる。

そしてそつと振り返る。

何故そう思うの、とでも言いたげに。

「…同じ……コロンの香りがする」

「……………」

「まさか、そういう所からばれるとは思いませんでしたわ」

そう言った直後、一瞬にして、その猫は黒髪的美少女の姿に変化した。

「ただのあーぱーさんではなかったようですね。少し、安心しましたわ」

不適な笑みで汀に近づく。

「怖くないんですの？」

「だって、敵じゃないもん」

威圧するような態度を、いとも簡単に崩す。

雉祢の顔が、一瞬強張った。

「闇魔とは…感じが違う。……怖いとか、そんな感じが全然しないもん」

「……………」

雉祢の表情が、フツと緩む。

「合格ですわ」

ポン、と汀の頭を軽く撫でて、雉祢は階段に腰を降ろし、汀を招いた。

「…教えて差し上げますわ。私の事を」

『……雉祢』

「大丈夫ですわよ、都。私が送り届けますから」

『……そうですか。……それならば……』

「単刀直入に申しますと、私は魔族ですが「真魔」と呼ばれる存在を赦された闇ゆゑ>なんですの」

「赦された…闇？」

「そう……人と交わることは殆ど無いけれど、世界には必要とされている部分なのですわ。」

夜があるから朝が訪れるように。光があるから影が生まれるように必要とされた影。それがあるからこそ光は初めて「光」としての力を発揮する。

「それには、ある程度の規格が必要なのです。闇の部分が大きくなりすぎないための条件が。」

……それから外れてしまったものが、闇の世界に還される存在…そしてあなたがしていることの相手なのですわ」

「……闇魔」

「そうですね。…闇の部分が大きくなりすぎた者達は、世界のバランスを崩します。貴女が彼等を闇に還すのを、

少しでも手助けするのが私の役目なんですの。規格から外れてしまったとはいえ、元々は私の仲間。」

…仲間の不備を正すのもまた私達の役目なんですの」

その横顔は少し淋しげなものに見える。

「…それじゃあ、雉祢ちゃんは、友達と戦う事になってしまうの…？」

汀が泣きそうな顔で雉祢を見上げる。

「心配ありませんわ、汀」

悟った雉祢が彼女を引き寄せ、胸に抱く。

ほんのり漂うコロンの香りが心地よい。

「私たちに<友達>といった感情は殆ど存在しませんから。それが

あるような者は、闇に堕ちたりしません。

友達が悪いことをしていると知った時、貴女は叱って、止めさせようとするでしょう？…それと同じですわ」

「でも……」

「貴女は自分の使命を全うさせなさい。それが何よりも私たちの為になることであり、願いですわ」

闇に還るということは、決して死ぬということではないから。

元いた場所に戻るだけなのだから。

だから、罪悪感だけは感じないで。

「……これを、渡しておきますわね」

雉祢が耳につけていたピアスをひとつ外し、髪の毛を一本抜くと、それに通した。

淡く輝いたかと思うと、それは銀色のチェーンと、牙を交差させた形をしたペンダントに姿を変えた。

「これを身に付けておけば、例え一人で行動していたとしても、近くにいる私の仲間が助けくれますわ。

……私を呼び出す時にもお使いくださいまし」

汀の首に掛け、優しく微笑んだ。

「ありがとう」

「話が長くなりましたわね。約束通り、送っていきますわ」

足元の砂を払うと、雉祢は再び猫の姿に変化した。

「背中にお乗りくださいませ。しっかり掴まってないと、振り落とされますわよ」

『振り落とされては困ります』

都が怪訝な顔をして雉祢を見つめる。

汀は黙って雉祢の首に手を回した。

ふかふかして、温かい。

「住所はどこです？」

「えっと………十字町の……」

「承知しましたわ」



次の瞬間、汀の足は地面から遠く離れていた。

数秒後、汀はマンションの前に立っていた。

「あれ？」

「着きましたわ」

早い。

「それでは、私はこれで」

「お茶くらい飲んでいったら…？」

あっさり立ち去ろうとする雉祢を、慌てて引き止めた。

「お心遣いは有難いですが、これから行かなければならない所がありますので。今回は遠慮させていただきますわ」

「そうなんだ……残念だね」

「次回は是非ご馳走になりますわ。それに、また、すぐに会えますわ」

淋しそうな顔をする汀の頭を撫ぜ、軽く会釈をすると、彼女の姿は再び空に吸い込まれていった。

### 3話

封印を解かれ放たれた魔物

その数 百を六、十を六、残り六匹

闇に堕ちたその魂は人を時に殺戮し、時に人を貪り食う

数<sup>あまた</sup>多の命が犇<sup>ひし</sup>めき合うこの世界で

\*\*\*\*\*

「ふああ……………眠いなあ」

大きな欠伸と共に、間延びした汀の呟きが聞こえる。

その呟きの理由がここ数日の「出勤」が多い事からくる寝不足だということとは百も承知の上だ。

そして、その仕事が増えている理由も一目瞭然である。

「都く、禅ちゃんいつ帰ってくるの……………?」

『さあ……………それほど日数はかからないと聞いていますが』

「みゅ……………」

今、汀の傍にるのは都だけだ。

禅箭は皇と共に、本州に渡っている。

理由はこれといって告げられていない。横浜には寄ってくることだ

けはわかっている。

皇が帰ってきたときに2日程二人揃って留守にすることはよくあるのだが。

今回は既に四日経っている。

『雉祢が来た事によって、安心したのですよ』

2つある尾をゆらゆらさせながら、足元の狼が腰を落とす。

「雉祢ちゃん……って、普段はどこにいるんだろ」

『仕事しているのだと思いますが』

「え!？」

意外。

『別におかしいことはありませんよ。姿を変え、人間社会に溶け込んでいる魔物は、結構いますから』

「……闇魔も？」

『勿論』

「ふえ……」

『下手に社会に溶け込んでいて、余計な知恵をつけている者が厄介です。…これからはそういう相手が増えるかと』

「ふにい……」

『……ところで汀、さつきから何をしていますのですか?』

ベンチに腰を下ろしたまま、返事はするものの微動だにしない主を見て、都が不審な表情をする。

「なんか、知らない事が多すぎるなあ、と思って」

ふう、と溜息をついて肩を落とす。

自分は、あまりにも知らない過ぎる。

都のような知識も、禅箭のような能力があるわけでもなくて。解っているのは自分が<器>ということだけ。

『初めは何も知らなくて当然です。わからないこと、疑問に思うことがあんならば、訊けばいい。それだけですよ』

「それはそうんだけど……」

訊こうと思っても、いざとなると訊けないことばかりなのだ。

知りたい事は、山ほどある。でもそれを訊いてしまうと、皆が離れていってしまうようで。

大切なものを失ってしまうような気がして。訊けなかった。

「闇魔って……あとどれくらいいるんだろう」

ポツリと漏らした一言を、都は聞き逃さなかった。

しかし、彼にも明確な答えは出せなかった。

『常盤の一族は……永い年月をかけて闇魔を封じる役目を仰せつかって来ました。＜闇狩主＞の誕生に関わらず

一時的な封印を施してきた故、ある程度の数は減っているものと思います』

「うん……それは知ってる」

一時的な封印をされた闇魔も、還して来たから。

全国各地に散らばっているものも、禅箭を始めとする常盤の一族により、汀の下に届けられた。

「……帰ろうつと」

『はい』

「湖海……湊さん？」

大学の中庭で、ふと呼び止める声があった。

「そうだけど」

振り向いた先にいたのは、一人の女性だった。

切れ長で、黒目がちの瞳。腰まで届く長い、ストレートの黒髪。

一般的に「美人」と呼んではば間違いない風貌。

「よかった。やっと会えましたわ」

コロンの香りをふわりと漂わせ、女性は湊に臆することなく近づく。

「で、誰？……どういう用？」

少し怪訝な顔をして、数歩後ずさる。

あくまでも直感ではあるが、何か異様な気配を感じたのだ。

「……急いでいるんだけど」

「大丈夫。大した手間は取らせませんわ」

につこりと微笑み、女性は更に近づく足を速めた。

いつの間にか、二人の周りには誰もいなくなっている。

それに気付き、周りを見回した刹那、女性は彼の眼前まで迫っていた。

「!？」

「……妹さんに、よく似ていらつしやるのね」

うつとりと魅入る様な瞳で彼の顔を見つめる。

実際の所、妹が兄に似た、という表現の方が正しいのだが、そこは訂正するほどの事ではない。

「……あいつを狙っている連中か？」

「あなたに、興味があるだけですわ」

女性は質問の芯の部分には答えなかった。

「何が目的だ」

震えを悟られないよう、湊が問う。

「血を」

彼の背に腕を回し、首筋に紅い唇を近付けて囁く。

「少し、くださいまし」

次の瞬間、女性の剥き出しにされた牙が、彼の首に躊躇うことなく突き刺さった。

「……………!!」

女生徒の悲鳴が聞こえた。いつの間にか周りの風景は元通りになっている。

女は、既に視界から消え去っている。

しかし、先刻まで起きていたことは、確かに事実。

その証拠に、首から流れる鮮血が、彼のシャツを紅いものに染めていた。

手で押さえるが、止まらない。その手もあつという間に赤い体液で染まり、更に地面をも染めようとしていた。

身体の力が一瞬にして抜け落ち、堪え切れずに湊は膝をついた。

「救急車呼べっ！！早く！！！」

「湖海！大丈夫か！しっかりしろ！！」

「何があつたの！？」

悲鳴と怒声が、彼を中心に渦巻いていた。

不思議な事に、意識ははつきりしていた。貧血からか、痛みは感じず、まるで他人事のような感覚がしていた。

それに代わるかのように浮かび上がってきた一つの感覚。

左目が、熱い。

包帯の奥に秘められたモノが、脈打つように彼の頭を刺激していた。

「湊ちゃん！！」

首に包帯を巻き、同級生にもたれかかった状態で帰宅した兄を、妹が驚いた声で迎える。

「あ、君が噂の妹さん？こんな状態じゃなかったら口説いているんだけどねー」

肩を貸していた男が、ちよつとごめんね、と言って上がりこむ。

「こいつの部屋、こつちでいいのかな？」

「あ、はい」

パイプベッドに彼を横たわせると、男はふう、と額の汗を拭った。

「あの……一体何があつたんですか？」

おずおずと汀が覗き込む。

湊の息は、少し荒い。意識も朦朧としているようだった。

「何かわかんないんだよねー。いきなり中庭で血い流して倒れてさ。救急車呼ぼうとしたんだけど『大丈夫だからいらない』の一点張りです。結局止血しただけ。講義もしっかり最後まで受けてさ。終わった途端コレ。多分貧血だと思うけど」

首の包帯には、まだうつすらと血が滲んでいる。恐らく、何度も交換されているのだろう。

「…あ、ありがとございました。ごめんなさい」

「いって。その代わり、今度デートしてね」

「ええっ！！？」

「冗談だつて」

わたわたする汀を見て面白そうに笑った。

自分にも高校生の妹がいるから、ついつい重ねてしまったそうだ。

そして彼は、何かあったらここに連絡するように、と、携帯番号を書いたメモを渡して帰っていった。

今時あまり見ない、爽やかな青年である。

「……………」

「あ、湊ちゃん、目え覚めた？」

そつと目を開いたのをすかさず見つけ、汀が喜びの声を上げる。

「あれ？汀……？……いつの間に帰ってきたんだ？俺……」

「串田さんって人が送ってくれたんだよ」

「串田……？」

「あ、ダメだよ！まだ寝てなくちゃ！」

身体を起こそうとした湊を、再びベッドに押し戻す。

「貧血は寝てるのが一番いいんだから！夕ご飯の買い物行ってくるから、ちゃんと寝ててよ！」

そして湊の返事を待つことなく、彼女は部屋から出て行った。

扉の閉まる音と、鍵の閉まる音が終わると、部屋の中は静かになった。

それを確認してから、そつとベッドから降り、洗面所へ向かった。

（貧血……ね）

首と、耳の後ろにある包帯の止め具を外し、丁寧に包帯を解いてゆく。

まだ湿気を帯びた、赤黒く染まった包帯が床に落ちた。

確かにあの時、傷を負わされた証拠である。

しかし、その傷痕は既に消え去っていた。血痕はあるものの、傷自体は無くなっている。

目元の包帯も取り外す。左目に当てていたガーゼもそつと取り除く。

そしてそつと両目を開く。

5年前に付けられた傷。その傷痕は今でも褪せることなくくつきりと残っている。

人として失った左目。その眼に住み着く異形のもものが覚醒を待っているかのように彼の瞳の色を変化させていた。

………黄金色に。

「予想していたとはいえ……あまり良い事態とは言えませんが」  
常盤家の棚から失敬した茶葉で淹れたお茶を飲みつつ、雉祢が溜息をつく。

『禅箭と皇殿が留守の間に何事も起こらなければ良いのですが』

「今回の事……収穫として、報告するべきなのでしょうね」  
あまり気が進まない。

「荒療治だったということは承知しているけれど……ああでもしなければ、もっと最悪な事になっていたことは確かですしね」

閻魔の血を少しでも抜く事によって、彼はまだ人としての意識と生命を保っていられる。

『遅かれ早かれ、事は起きます。その時が少しでも遅くなる事を祈るしかないでしょう』

2尾の狼が、ゴロンと伏せる。

「らしくない事を言いますわね。普段の貴方だったら、有無を言わず……見つけた時点で終わらせていそうなものを」

軽く微笑み、都を見つめる。

『私一人では判断しかねる事だからですよ』

「……そういう事にしておきますわね」

視線を合わせずに言ったその台詞は、優しさから出てきたものなのかどうかは誰にもわからない。

「でも……汀には、どうやって伝えましょうか」  
実の兄が、敵になってしまおうという事を。



彼の左目に眠る闇魔が覚醒した時、彼女はどのような決断を下すのか。

そしてその時はそう遠くないという事を、雉祢と都は薄々と感じていた。

## 4話

あなたは敵なの？

それとも味方？

いいえ どちらでもかまわない。

あなたが あなたであることに かわりはないから。

私にとってかけがえのない あなたという<人>であることにかわりはないから。

人……………？

違うよ、もうお前は<人>なんかじゃない。

汚れた血をその身に埋めた、人とも魔とも成り得ない存在。

早く自分を受け入れるがいい。そうすればすぐにでも楽になれる。

その身も、心も、全てを捧げ、完全なる魔物へと変貌を遂げるがいい。

\*\*\*\*\*

真夜中に、爆風と共に数多の砂粒が舞い上がる。

その砂埃に紛れて、岩壁ほどの大きさをした巨大な亀に向かう影がある。

そして、その影は躊躇うことなく亀の甲羅に乗り、苦もなく右手の拳を叩き込んだ。

「凄……」

若い僧がその光景を見て啞然とする。

これが＜常盤＞の力……

「良き後継者を持たれたようですね、皇様」

年配の僧侶が皇の傍らに立ち、微笑む。

「いやあ、まだまだですよ」

ストップウォッチを片手にして、皇が愚痴をこぼす様に答える。

「しかしあの魔物は、我々5人掛かりでやっと取り押さえたようなものですぞ。封じる隙もない故、貴方たちをお呼びしたわけですが

……まさか、あの少年一人に任せるとは」

「ジジィッ、瓶よこせっ!!」

僧侶の言葉を遮り、禅箭が叫ぶ。

お爺様と呼べ、とだけ言つて皇は小瓶を投げつけた次の瞬間、皇を除く、その場に居た全員が息を飲む中、眩い光が放たれた。

そして、砂煙が落ちていた頃には、既に先刻まで砂浜を揺るがしていた亀の姿は跡形も無く消えていた。

「……ほらよ」

砂を叩き落としながら禅箭が乱雑に札の貼られた小瓶を放り投げる。近くに居た、呆然としてた僧が慌ててそれを受け止める。

その中には、先刻の亀が入っていた。身体は小さくなっているものの、間違いない。

「時間かけすぎだぞ、禅箭」

ストップウォッチを止め、皇が叱咤する。目盛りは15分ほどを指している。

「タートルタイプは防御が高いんだよ」

「言い訳するな」

「ヘーヘー」

「怪我は幾つだ」

皇の問いに、禅箭が全身を見渡す。

「左足に掠り傷、右腿に引つ掻き傷。あとちよつとだけ右手痛めた」

右手の拳からは血が流れていた。それを舐めて皇の顔色を窺う様に禅箭の動きが止まった。

しばしの沈黙が流れる。

「失格」

いとも簡単に冷たい判決が下された。

「もう一回出してやって、ソレ」

瓶を持っている僧に声をかける。彼は戸惑いを隠せないでいた。

「出す……って、この魔物を今一度解き放つのですか？」

「そう」

「しかしこの瓶の中にいるものは、体力を回復させられるわけで」

「知ってる。いいから出して」

「……………」

「ちよつとは休ませては如何ですか？」

見かねて格の高そうな僧侶が口を挟む。

禅箭は口には出さないものの、かなり疲れている様子だった。

「…禅、休むか？」

「……………」

「今夜中にノルマこなさないと、明日の飛行機に間に合わないぞお」

「…やりやあいんだろ、やりやあ」

半ばヤケでも起こしたような声で、肩で息をしたまま禅箭が睨む。

「というわけで、ヨロシク」

につこりと笑顔で、背後で孫に睨まれているのも全く気にしない様子で皇が僧に言った。

「あの、失礼とは思いますが、お聞きして宜しいでしょうか？」

「何？」

再び砂煙が舞い始めた海岸で、恐る恐る僧が皇に問い掛けた。

「ノルマ、というのとは一体何の事なのでしょう…？」

「自分は無傷のまま、アイツを捕らえる事」

あっさりと言い放つ。

仮にもここにいる僧が5人掛かりでやっと結界に閉じ込め、それを維持するのが精一杯だったというあの魔物を、傷を負わずに封じるなんて。

しかもたった一人で。

鬼だ、鬼がここにいる。

その場に居る僧全員の背に寒気が走った。

\*\*\*\*\*

「つてえ……………」

ようやくノルマを終え、ホテルに戻った禅箭が、ベッドに横たわったと同時に潰れたような声を出す。

「ま、とりあえず合格点って所だな。今回の所は」

法衣を脱いだ皇が笑いながら着替える。

今回の所は、という含みが気になるところではある。

が、今はそんな事を気にする余裕は禅箭には無かった。

「いやあ、単純な孫を持つと楽だなあ」

浴衣に着替え終わると、皇はケラケラ笑ってさっさと自分だけ浴場へと行ってしまった。

「あんのクソジジイ……ウサ晴らしみたいにこき使いやがって……」  
静かになった部屋で、怨念を思いつきり込めて呟く。

横浜で両親の墓参りをしてきた所までは良い。

それから数時間と経たないうちに青森へと向かい、次に群馬。再び東京に戻ったと思ったら一泊した後にそのまま京都へ直行。佐賀を経て、そして今は沖繩にいる。

どうやら「修行」という台詞を使って、国内の仕事の殆どを禅箭に押し付けたようだった。

それと同時に「後継者」としての名前・実力を広めるという理由もあったようだが、今の禅箭には気付く由も無かった。

「禅ー、風呂入らないのかー？気持ちいいぞこの湯は」

皇が身体から湯気を立たせながら部屋に戻ってきたのは一時間後だった。

よほど疲れたのか、彼が部屋を出た時と全く同じ体勢のまま、禅箭は眠り込んでいた。

皇が部屋に戻ったのも気付かないほどの熟睡だった。

「よく眠ってるなあ……今襲われたらどうすんだコイツ」

すーすーと小さな寝息を立てたまま微動だにしない。

「かーわいい寝顔しちゃってまあ……」

子供の頃と変わらない、あどけない寝顔を見て、思わず口の端が緩む。

そして彼のこの熟睡が、皇が傍に居ることによる安心感から来ているものだという事を、本人は知る由も無かった。

軽く頭を撫で、解けていた禅箭の右手の包帯を巻き直してから、彼

もまた眠りについた。

机に置かれた小瓶の中では、小さな亀が横たわっていた。

\*\*\*\*\*

朝。セットしておいたアラームよりも早い時間にけたたましく鳴り始めた電話のベルで叩き起こされる。

鳴っていたのは皇の携帯だった。

寝起きという事を微塵も感じさせない応対を寝惚け眼で見ながら、禅箭は上体を起こす。

何か重要な話なのか、電波状況が悪い部屋から小走りで祖父は部屋を後に行って行ってしまった。

大きな欠伸と伸びをしてから、カーテンを開ける。

眩い朝日に思わず瞳を閉じる。

今日の最高気温は何度くらいまで上がるのだろうか。

瓶の中に閉じ込められた亀が何やら喚いているが、気にしない。

恐らく、眩しいから閉めろ、とも言っているのだろう。

彼らは本来、夜闇の中を動いているので、光には弱い。

本当に弱い奴だと、日光に当たっただけで消滅することもある。

特別な封印が施されているこの瓶の中では関係無い事ではあるが。

逆の発想をすれば、白昼堂々と歩き回るものであれば、かなりの実力を持っているという事になる。

あまりにもぎゃーぎゃーうるさいので、無造作に瓶を手に取り、バッグの中に放り込み、チャックを締めた。

その他大勢が入っている瓶の群れの中に。

「おお、起きたか我が孫よ」

何食わぬ顔で戻ってきた皇が嬉しそうな声をあげる。

「誰かさんの携帯のお陰でね」

皮肉をたっぷり込め、明らかに不機嫌な顔で禅箭が答える。

「それは都合がいい。さつさと荷造りしろ」

「……は？」

「急用が入った。このまま東京戻るぞ」

「はあ!？」

何というハードスケジュール。確か今日は昼過ぎの飛行機に乗る予定だったはず。

朝食も取らずに那覇へと向かう羽目になった。

これで飛行機に乗れなければまだ時間に余裕ができるのだが、そうはさせてくれないのが一族の力だった。

「…で?どういった急用が入ったって言うんだよ」

ギリギリで駆け込んだ飛行機の中で禅箭が肩で息をしながら訊く。

「まずい奴等が覚醒したらしい、という情報が入った」

微かに息を震わせて、皇が答える。

まさか、湊が？

嫌な予感が禅箭の背筋を走った。

しかし、それはすぐに杞憂と気付いた。皇ははっきりと「奴等」と言っている。

湊の中に入り込んでいるのは一匹だけだ。少しだけ安心し、ふう、と溜息を漏らした。

「いいか、俺は東京で済ませていく用事がある。お前はそのまま戻れ」

皇の表情はいつになく厳しい。禅箭は呼吸を整えながら、黙ったまま強く頷いた。

\*\*\*\*\*

頭が、痛い。

左目が、熱い。

こんな夜を何回繰り返しただろうか。



最近は自分の意識が大分薄れているような気がする。

眠りにはつけない。自分が眠ってしまったらあいつが起きてしまうかもしれない。

そして自分はこのまま目覚める事が無いかもしれない。

測り知れない不安と恐怖が湊の中に渦巻いていた。

「いいよ、いいからさっさと眠れよ」

「……………!!」

今の声は、誰だ？

聞き覚えの無い声。第一、ここに今いるのは自分だけだ。

「眠らないと、後が辛くなるぜ」

「!？」

喉に微かに感触があった。

声を出した感覚。

話していたのは、自分か？

いや、それは無い。

とすれば、答えは一つしか無かった。

\*\*\*\*\*

禅箭が皇と空港で別れ、家に着いたのは昼過ぎだった。

都の姿は見えなかった。恐らく、汀の護衛をしているのだろう。

学校に向かおうかとも思ったが、今更行っても意味がないと判断し、とりあえず荷物を片付けることにした。

一通り片付けが終わったのを見計らったように、玄関のチャイムが

鳴った。

こんな時間に訪問者の予定は無い。

どうせ新聞の勧誘か何かセールスだろう、と禅箭は無視する事にした。

しかし、その訪問者が玄関から去る様子は全く無い。

ひたすらチャイムを鳴らし、出てくるのを待っている。

「帰って来ているんだろう？」

聞いた事の無い、男性の声。

（鬱陶しいなあ）

痺れを切らして、禅箭が玄関のカギを開ける。

「あれ？」

玄関に立っていた人物を見て、禅箭が面食らう。

よく見知った人物だったからだ。

「湊……？」

「何だ、常盤の人間にしては勘が鈍いんだな」

「！？」

明らかに彼のものとは違った声に、瞬時に身構え、額の印を開く。

まさか……

背中に冷たい汗が伝う。次の瞬間、圧倒的な瘴気が彼に向かって牙を剥いてきた。

「うわっ……………！」

古い家のあちこちが軋む。吹き飛ばされそうなのを抑えるのが精一杯だ。

湊の中にいたのは、こんなに強い奴だったのか……

間違いなく、今まで戦ってきたものよりも強い。

自分一人で勝てるのかどうかさえも疑問と感じさせるほど、彼の魔気は凄まじいものがあつた。

ふと、瘴気の渦が止んだ。

「挨拶はここまでにしておこう」

湊の顔のまま、余裕を感じさせる表情を禅箭に向け、彼は家に上が

ってきた。

「……？」

先ほどのまでの殺気は微塵も感じられない。先刻の瘴気と魔気がなければ、湊本人とさえ感じられる。

「ちよつと待てよ、何の用でここに来たんだ！湊はどうしたんだよ！！」

「安心しろ、アイツは死んじやいねえよ」

ひらひらと手を振りながら、まるで自分の家かのような振る舞いで居間に入った。

「ああ、俺茶よりもコーヒーの方が好きなんだわ」

「贅沢言うな」

そう言いながらすっかりコーヒーを入れた禅箭は結構お人よしのかもしれない。

嫌な沈黙が二人の間を流れる。

「ま、単刀直入に言わせて貰うけどな」

先に口を開いたのは、彼の方だった。

「取引に来た」

「取引……？」

意外な申し出に、思わず訊き返す。

「ああ。お前等にとっても悪くない条件だと思うぜ」

「それは条件次第だろう」

「相違ねえ」

ケラケラと笑う。緊張感と言うものがまるで無いようだった。

それを湊の顔でされると、余計に違和感を感じた。

「ま、こつちからの条件は一つだけだがな」

「だから何だよ」

微妙な沈黙が再び二人の間に流れる。やがて、吐き出すように言い放った。

「汀に、俺の正体を教えるな。その代わり、俺もアイツに手を出さ

ない」

「はあ!？」

あまりにも意外な申し出に、素っ頓狂な声を出さずにはいられなかった。

「ちよつと待てよ、どういう事だ!？」

「そのままの意味さ。俺はあんたらとドンパチやる気は無いって事だ」

「でも、お前が閻魔でいる限り、俺達はお前を封じなきゃいけないんだぞ」

「まあ、それもあるだろうな。でも元々、俺はこつちの世界に出てきたかった訳じゃないし。戻る時があるなら戻っちまっても一向に構わないんだよ」

「それは矛盾しているんじゃないのか？お前は5年前に汀を襲ったんだろ？その時に湊と融合したんじゃないかったのか？」

「そこが問題なんだよ」

まるでここからが本題だと言わんばかりに、迫ってきた禅箭を押し返す。

「いきなり信じろっていうのも虫が良すぎる話だとは思っけどな。

あの時の俺は、操られていたんだ」

「誰に」

「それはまだ言えねえ。そのうちイヤでも知ることにはなるがな。

それで、操られてあの娘を襲ったが、コイツに邪魔されて失敗してこうなっただろう？正直、自分でもどうしてこんなことになったのかわかんねえんだよ。で、仕方なくこうして暮らしているうちにな、何か……こう、不思議な気分になっちまったんだよ」

閻魔の時には感じなかった感情。

きつと、閻魔のままでいたら一生感じることの出来なかった感情。

「あいつ……汀はさ、いつも笑ってるだろ？それ見てたら、何かさ、ずつとあの笑顔を見ていたくなつた」

守りたくなつた。

全く予想しない展開だつた。

まさか、閻魔にこんな感情が芽生えるなんて。

「あいつに、今まで意識が途切れている事くらい聞いてるだろ？その時に殺そうと思えば、いつでもできたんだぜ」

戸惑っている禅箭を見透かすように、不敵な笑みを浮かべる。

確かに、それは湊本人の口から聞いていた。

「今のところは、まだ何もしていないけどな」

「……脅しているのか？」

「別に。まあ、コイツ本人が最近かなり頑張りすぎてるみたいだからな。下手に壊れちまうとこっちも迷惑だからな。先手を打つてるだけさ」

どこかの姉ちゃんにまた貧血起こすまで血を抜かれたりしたら堪らないからな、と付け加える。

「どちらにしろ、お前を操っていたと言う黒幕が出てこないと信じるわけにはいかないな」

もしこいつが自分の意思で汀を襲ったという事ではないのなら、然るべき敵は別にいるという事になる。

しかも、彼ほどの力を持った閻魔を操るくらいの強大な力の持ち主だ。

「それは仕方ないだろうな。構わねえよ。用件は告げたし、そろそろ帰るわ。コイツも起きる頃だしな」

余っていたコーヒーを一気に飲み干し、それじゃーなと手を振って玄関口へと向かう。

「もしお姫様が心配なら、都でもこっちに遣すんだな。あいつならお前と違って躊躇い無く喉笛を掻っ切るだろうよ。そうすれば俺もコイツも、一瞬で殺せるぜ」

「……………!!」

笑顔でとんでもない事をさらりと言う。不安と躊躇を全て見透かされたような気がして、禅箭は俯いた。

「そうだ、俺は直接コイツとは話せないから、伝言頼むわ」

靴を履き終えた後、思い出したかのように振り向く。「何だよ」

「妹を襲ったりしないから安心して夜は眠れ。あと、お前が起きている間、基本的に俺は眠っているから、その間俺の＜力＞を使わせてやる。コントロールできるようにしておけよ。ってな」

「お前の…闇魔の力を、人間が使いこなせるのか？」

「できるさ。コイツならな」

多少なりとも、闇魔の血が溶け込んでいる身体なら。

そして彼の精神力の強さなら。きつと使いこなせるようになる。

それほどまでに、彼は湊という人間を評価していた。

次に会う時は戦いの場だ。

そう言って彼は帰っていった。

親友の中に巢食う魔物。それは予想とはかなり違った展開を持ち込みそうだった。

そつえば、名前聞いてなかったな……

## 5話

解くべき事は、あと3つ。

湊と「彼」の分離方法。

汀の潜在能力の、更なる覚醒。

そして……

\*\*\*\*\*

湊が帰った日の深夜。突然、常盤家の電話が鳴り響いた。  
どうせこんな時間では飛行機は飛んでいない。

帰りが遅れるという報告だろう、と思いつつ禅箭は受話器を取った。

「はい、常盤……」

「……………!!」

受話器の向こうから、何やら叫び声が聞こえる。  
離れた場所からの声らしく、内容まで聞き取る事はできなかった。  
時折ドオン、という地響きのような音が混ざる。

「……はやく……来て……」

やっと聞き取れたのは、掠れ気味の女性の声。

ノイズに邪魔をされ、それでもやっと聞く事ができたその声に、禅  
箭は聞き覚えがあった。

脳裏を過る嫌な予感と、背筋を走る悪寒。

「……<sup>かなえ</sup>奏……さん……？」

返事は無かった。聞こえなかっただけかもしれない。

ノイズに掻き消されたまま突如その電話は切れ、着信記録を頼りに  
かけなおしても、誰かが出ることは無かった。

ツーツーという音が虚しく響くだけだった。

もう一度かけなおそうと一端受話器を置いた刹那、その瞬間を狙う  
かのようにけたたましくベルが鳴った。

表示されている電話番号は、皇の携帯のものだった。

「禅箭、今すぐになっちゃうんの所へ行け！！急げ！」

今まで聞いた事が無いような、切羽詰った声が響いた。

「今、奏さんから電話が……！！」

話を続けようとして、息を呑む。

受話器の向こうで、地響きが聞こえる。

つい先刻聞こえたものと限りなく近い震動。

「お前の今やるべき事は、何だかわかるな。行け」

落ち着いた、低い声が不思議なくらい耳に響く。

それだけ告げて一方的に切られた受話器を舌打ちしながら戻し、禅  
箭は家を出た。

静かだった。

不気味なくらいの静けさ。嵐の前の、とでも言うべきか。  
木の葉一枚すら微動だにしない。



「雉祢えっ!!」

空に向かって声を投げつける。それが吸い込まれた数秒後に、疾風と共に黒猫がその姿を彼の前に現した。

「禅サマ!! いつ戻られたのですか!? 仰ってくだされば迎えに行きましたのに」

嬉しさを全身で表した、歡喜の顔と声で出迎えた。

「悪いけど、汀の所まで大至急行ってくれないか」

「……何かありましたの?」

尋常でない禅箭の表情に、雉祢の顔が曇る。

「わからない。お前は何も感じないか?」

「いえ、私は特に何も……。急ぐのでしょうか? さあ、お乗りください」

滑らかなビロードの毛を少し立たせ掴み易いように変え、禅箭をその背に導く。

マンションの入口に、見覚えのある影があった。

「遅かったじゃねえか。ま、ギリギリ間に合ったみたいけどな」

「お前っ……!!」

「隼未<sup>はやみ</sup>」

それまで手に持っていたタバコをそのまま手の上で燃え尽きさせ、その灰をフツと吹き飛ばして、それだけ言う。

「それが、お前の名前か」

「あいつが、タバコの煙を嫌うからな。外で吸うと言って出てきた」

「……どういう事ですの? ……何故、彼が……」

話についていけない雉祢が会話に割り込んだ。彼の左目に少しだけ怯えを見せながら。

「説明したいのは山々だが、どうやらそんなヒマは無さそうだな」

2本目のタバコに火を点け、苦笑いをして頭上に目をやる。

空に、亀裂が走った。ように見えた。

突然雲が渦巻き、その中心部からは稲妻が絶え間なく、そのまま全てを切り裂くかのように閃光と爆音を轟かせていた。

「都は？」

その様子から目を離さないまま禅箭が訊く。

「部屋に居る。誰かが傍にいなきや危ねえだろ。……全て知ってるよ、アイツは。さっき話したからな」

「なんだ、私だけ蚊帳の外なのですね」

「まあそう言いなさんな。終わったらゆっくり話してやるから。二人つきりで」

「その言い回し止める。湊のイメージ崩れる」

「言うねえ」

空の稲妻が一際大きな閃光を発した直後、それらは嘘の様に治まった。

そして1分と間を置かず、一筋の竜巻が舞い降りた。

その中には、子供ほどの背丈の影がうつすらと見える。

「……お出ました」

現れたその姿に、禅箭が一瞬、息を呑んだ。

あどけなさを残した、小さな少年が無邪気な笑顔と共に出てきたからだ。

「……見かけに騙されるなよ」

それを察したのか、隼末が叱責する。

「わかってる」

隠そうともしない膨大な魔気に倒れそうになる。

ふと視線を逸らすと、雉祢が今まで見た事が無いような怯えを見せていた。

「……雉祢、大丈夫か？」

「……ですわ……」

禅箭の声さえ聞こえないかのように、ガタガタと震えながら立ち竦

んでいる。

「嘘ですわ……何故、彼が……」

「……知ってるのか？」

「ごきげんよう、雉祢様」

可愛い声で彼女の名を呼ぶ。それを聞いて、彼女の身体が跳ね上がる。

「積もる話は色々あるけれど、少しだけ待っててくださいね」

にっこりと笑って、禅箭を見る。

「常盤か……忌々しい一族の末裔……」

一瞬にして表情が変わる。先刻までとは打って変わったかのような形相で右手を彼に向かって翳す。

そして不敵な笑みを浮かべたかと思った刹那、雷撃が躊躇う事無く発射された。

白い光と凄まじい爆風が巻き上がる。

「……あつぶねえ」

間一髪で結界を張ったものの、その威力に冷や汗が伝う。

地面が巨大な爪で抉られたかのように裂けていた。

「その印……そうか、お前が護人か」

禅箭の額の深紅の印を見て、チツと舌打ちをすると、再びゆっくりと構えてきた。

「闇狩主は何処にいる」

都が結界を張っているのか。どうやら彼には汀がどこにいるのか感知できないようだった。

「確かにここから波動を感じた。この辺りに居るのは間違いないんだ。………出せえっ……」

一撃前とは比べ物にならない程の大きな雷の塊を両手で作り出し、禅箭に向かって投げつけた。

（マジかよ……）

今回ののはとても防ぎきれそうも無い。しかし、避けられる大きさでもない。

いくら結界に守られているとはいえ、近隣への被害は測り知れないほどの威力を感じさせた。

「馬鹿っ、さっさと避ける！！当たったら跡形も残らねえぞっ！！」  
隼末が叫ぶが、身体が思うように動かなかった。

どうする……？

迷っている間にも、まるで大蛇がうねる様に彼の攻撃は目前まで迫ってきていた。

「……ダメエーッ！！」

彼に当たる寸前に、大きな声がこだまする。

「！？」

雉祢の叫びに、その攻撃は掻き消された。

「何故邪魔をされるのです？」

不満に満ち溢れた顔で少年は雉祢を見る。

「下がりなさい……！！この方を傷つける事は許しません！」

凜とした表情で命令する。しかし、その足はまだ微かに震えている。

「……フウン……これは、兄者に報告しなくちゃいけないねえ」

禅箭と隼末、そして雉祢を交互に見詰め、

「お前たちの顔……覚えたよ」

と言いつ残し、現れた時と同様に、雷雲に吸い込まれるように消えていった。

「おい、大丈夫か」

隼末が禅箭の腕を引っ張る。

「……ん、ああ……」

少しだけ放心していたらしい。声をかけられて初めて禅箭が動いた。

「……あいつが、お前の言っていた黒幕か？」

顔を軽く押さえて、禅箭が暗い表情で隼末を見る。

「そうだ、と言いたい所だが、少し違う。俺よりもそっちのお嬢さんの方が詳しそうだかな」

彼が視線を移した先では、雉祢が肩を押さえて蹲っていた。

顔面は蒼白で、今にも泣き崩れそうな空気を漂わせ、ただただ震えていた。

「雉祢」

「あの子は……闇魔達のトップとも言える魔物<氷醒ひさまめ>の弟、ですわ……」

肩を押さえて、独り言の様に雉祢が呟く。

「さっきあいつが言ってた「兄者」だな」

「……ええ」

少しは落ち着いてきたらしい。隼末の言葉にはつきりとした応えを返した。

「氷醒……」

「で、そいつがお前が知りたがってた黒幕ってヤツだ」

その返答を待っていたかのように、隼末が付け加える。

「まさか、あの子達が出てくるなんて……」

思い返したのか、ヘタヘタとその場に座り込んだ。

「何らかの形で封印が解けちまったか……とりあえず、俺の事はバレなかったみたいだけどな」

イラついているのか。新しいタバコに火を点け、大きく吸い込んだ煙を空に向かって吐き出す。

「封印？」

「私達が……正確には私の父が、とある地に封じていたのです。……危険すぎるのです。今までの闇魔とは比べ物にならないくらい……過去の闇狩主で、彼らの送還に成功した者は居ません。……だから、今までこの戦いは終わっていないのです」

「ウラを返しちまえば、ヤツらさえ還しちまえば、あとは雑魚ばかりって事になるワケだ」

「そんな奴等がいたのか……」

皇が言っていた「ヤバい奴等が覚醒した」との情報は、彼らの事で間違いないだろう。

そうであれば、電話の内容も理解できる。

「でも、その封印は何故解けたんだ？」

「わかりませんわ。でも、ひとつだけハッキリしている事があります」

雉祢が大きく息を吸う。そして未だ微かに震える声で残酷な事実を告げた。

「封印を施していた父は……死にました。あの方は我々の中で最高の「力」を持っていたお方……よって、彼らを再びこの世界で何処かの地に封じることが不可能になります」

あまりにも不利な選択肢しか残らない。

「奴等が狙うのは、自分達を封印できる可能性があるモノ全てだ。

闇狩主は勿論、常盤の一族も狙われるのは確実だな。血が濃いほど、奴等に嗅ぎ付けられるぞ」

どうする、と言わんばかりに隼末が禅箭を見る。

「……純血は今では3人しかいない」

呟くように禅箭が答えた。

自分と皇と、あと1人。

爆音が休む間もなく押し寄せる。

既に視界は血と埃で失われ、身体感覚も失われつつあった。

志半ばにしてこのような事になるうとは。

（大丈夫、きつとあの子達が全てを終わらせてくれる）

それをこの目で見られないのが残念で仕方が無い。

指先から確実に体温が失われてゆく。

まさか、自分が一太刀も相手に浴びせる事無く散る事になるとは思わなかった。

今にも崩れ落ちそうな岩場から見下ろす影がぼんやりとだけ見える。

「わざわざ私が出向くまでも無かったか……」

冷たい声が恐ろしいほどに響く。

悔しい。

そしてそれ以上に恐ろしい。

「ゴメンね、兄さん。禅箭……後は頼んだよ」

彼女が最後に振り絞った力を放出する前に、崩れ落ちた岩が無情にも彼女を押し潰した。

その瞬間、常盤の純粹な血を持つ人物・奏の生命の炎が掻き消された。

## 6話

焼け落ちた家屋が、そこにはあった。

既に鎮火されており、所々に微かに煙が燻っているだけだった。

そこから程なく離れた場所にある、断崖。

余程大きな崖崩れがあったのだろう。まるで雪崩の跡のように幾つもの岩が敷き詰められるように崩れ落ちていた。

その中心部に見える、血痕。

まだ温もりを微かに残しつつ流れるそれは、徐々に、そして確実に冷たいものへと化していった。

「奏……」

既に返事が返ってこないと解っていても、語りかけずにはいられない。

自分一人の力では、この場所から彼女を出すことは不可能だ。

「……悪いな……」

辛うじて見つけ出せた頭部に布を被せ、皇はゆつくりとそこから立ち去った。

この場に彼女を残していく事は、とても心苦しいものがある。

しかし、彼は進むしかなかった。まだ生きている人間のために。

決して当たって欲しくない予想は、彼らの僅かな期待を裏切り、的中した。

「ワシの所に来たのは、髪の毛の長い女だったよ」

無理をして家に帰って来た皇が報告する。

「炎路、ですわ…氷醒のすぐ下の」

「俺たちの所に来たのが末っ子の風墮」

「俺とジジイが寸前まで居た沖繩に出たのが金髪ポニーテールの女」



「……」

『多分、それは地<sup>ち</sup>叶で間違いないでしょう』

足元の都が尾を地に這わせながら告げる。

「つてことは、奏の所に氷醒が行ったんだ……」

「……話がよくわかんない」

汀が頬を膨らませる。

「後でわかりやすく纏めてやるよ」

湊（隼末）が頭をポンポンと軽く叩く。

「……なんで湊ちゃんが詳しいの？」

「それも後で」

「……」

どうやら汀はまだ不満があるようだった。

しかし、それを口には出さずにいた。邪魔になるとでも思ったのだろう。

「とにかく、奴等にこの場所がバレた事は確かだ。近いうちに再び来るのは間違いないだろうな。……全員で、という可能性も否定できない」

皇の台詞に、空気が凍りつく。

認めたくない現実が迫っていた。

たった一人、しかも末弟にさえ敵うかどうか解らない相手にどう戦えというのか。

「ワシの今後の予定は全てキャンセルさせる。……備えるからな」

帰り道で告げた皇の一言が、禪箭には死刑宣告に聞こえた。

「大丈夫なのかよ……ソレ」

ふと、彼の腕を見た禪箭が言う。

「気付いていたか。……皆には言つなよ」

皇がばつが悪そうに苦笑する。

衣服を変えて誤魔化したつもりだったが、どうやら身内だけは騙し

きれなかったらしい。

彼の左腕は、見るも無残なほど焼け爛れていた。

「奴等が使う力は特別なものらしいな…治りが悪い」

治癒能力を限界まで高めても、殆ど回復していなかった。

「しかし湊君の中の魔物があんな奴で良かったな」

それとなく話題を変える。

確かに、今は彼の存在がありがたい。

一つ心配事が減ったと同時に、大きな味方を受け入れた事になる。

あれから中身が入れ替わった本人への説明に多少の労力は必要としたが。

隼末の宣言通り、彼の力を使えるように努力すると宣言していた。

汀への対応をどうするかという点については困っていたみたいではあったが。

そして二人とも、奏の死については触れなかった。

禅箭は特に何も訊かなかったし、皇も敢えてその話題を出そうとしなかった。

両親を亡くしてから、留守をしがちな祖父に代わって禅箭の世話をしてくれたのは、彼の年齢の離れた妹である彼女だった。

決して彼女は弱い人間ではなかった。寧ろ常盤の一族の中ではかなりの實力を持つ部類に当たる。

その彼女がいともあつさを葬られた事は脅威であり、恐怖であり、また怒りでもあった。

「禅箭：解っているだろうが、落ち着けよ。冷静さを欠くな」

「……わかってるよ」

頭では理解できている。

しかし心の奥底には、言葉に言い表せない不安が過っていた。

「そうか…闇狩主の居場所が判ったか…」

「そうなの。誉めてよっ、兄者」

不敵な笑みを浮かべる氷醒の周りを、嬉しそうに風墮が跳ね回る。

「調子に乗るなよ、風墮。たまたまお前が行った地に居ただけの事」  
炎路が口惜しそうに爪を噛む。

「でもロクに手も出さずに帰ってくるなんてね。ダサーイ」

キヤハハ、と地叶が笑う。

「まあそう責めるな、炎路、地叶。私に闇狩主を葬る楽しみを譲るために退いたのだろう？風墮」

「そうそう、そうなんだよ、兄者！！」

ザマアミロと言わんばかりに姉二人に対して舌を出し、風墮が更にはしゃぐ。

「して、いつそちらへ向かわれるのですか？兄様」

嫌悪の表情を表に出さないように堪えながら進言する。

「まあそう急くな。準備というものがあるだろう」

準備、という言葉聞いて、3人の表情が固くなる。

「こつちに残っている魔物を全て、我等が眷属に変えなければなるまい。念には念を入れ、確実に潰さなければならぬ連中だからな」

「……………御意」

末弟・風墮の襲撃から2週間が経過した。

今か今かと懸念している再襲撃は無く、いつ中止になるかと心配されていた奏の葬儀も滞る事無く終了した。

それが反って怖かった。

一族を一掃するには絶好のチャンスであった筈なのに。

「にしても何なんだよ、この人数……」

弔問客の多さに、禅箭が思わず溜息をつく。

「何を言っている。まだ半分にも満たないぞ」

嘘だろオイ。

皇の言葉に、更に大きな溜息が出た。

一体何千人、いや何万人来るのだろう。

絶え間なく続く人波はいつまで経っても終わる気配が感じられなかった。

「失礼致します」

ようやく人がまばらになり、横になっていた禅箭の前に、1人の男性が現れた。

「ご挨拶が遅くなり申し訳ありません。私、伊万里と申します」

差し出された名刺を受け取ると、弁護士のものだった。

その名前には聞き覚えがあった。皇から聞いていた風貌と照らし合わせる、本人である事に間違いは無さそうだった。

「皇様から普段の管理運営に関わる事で微力ながら助力させていた  
だいております。また、一族全員への連絡事項も承っておりますの  
で、何かございましたらご連絡ください」

まだ色々忙しいだろうから、取り急ぎご挨拶まで。と告げて、彼は足早に去っていった。

『このような場所で何をされているのですか？』

夜半になってようやく静けさを取り戻した丘の上に皇の姿を見つけた都が問い掛けた。

「ああ、都か……星を見ていた」

気付いた皇が優しく微笑む。

『星見……ですか？』

「ちょっと嫌な予感がしてな」

星空を見上げると、満天の星の中、その幾つか流れていくのが肉眼でも確認できた。

「案の定、凶星が流れたな……」

ほんの一瞬のものではあったが、一際大きな星が流れたのを皇は見逃さなかった。

「……誰かが、近いうちに命を落とす……かもしれんな」

それが誰なのかまでは判らない。

『ゆくゆく消え得るものではありませんが、出来れば今の事態では遠慮を被りたいものですね』

今一度星が流れるのであれば、願いたい。

これ以上の犠牲が出ること無かれ、と。

3度唱える事が出来れば回避できるのだろうか。

\*\*\*\*\*

最初にその異変を感じたのは、雉祢だった。

陽は既に落ち、街灯が灯っている道路を歩いていた時に、いきなり目前に魔物が現れた。

しかし、彼女はその姿に見覚えがあった。

「……どうしたと言うの？」

ぼろ屑のように身体のおちこちに傷を作った魔物が、息も絶え絶えに近づいてくる。

「雉祢様：申し訳在りません……」

既に意識も朦朧としているらしい。合わない視点で、彼女の声を引き金にするかのように、針の飛んだレコードのように、同じ言葉を繰り返す。

「言いなさいっ、何があったの!？」

思わず声が荒くなる。

「我々……仲間全て……墮ちました……」

「！？」

何故？どうして？

閻魔の数は、これ以上増えないはずなのに。

「やられました……水知<sup>みち</sup>も、岩撫<sup>がんなで</sup>も……皆、ヤツラの眷属に……」

閻魔に化したと言う訳ではなく、閻に属するものに従うものとして、塗り替えられた。

「どうか……どうかお許しください……私も奴等の種を植え付けられました。奴等にこの身体を捧げてしまっ前に、どうか、どうか……！」

「ありがとう……ここまで頑張って来てくれたのね」

いとおしむ様にその身体を撫ぜ、雉祢が唇を噛み締めて微笑む。

ゆっくり、おやすみ。

そう告げると、その魔物はありがとうございます、と涙を落とし、塵となって消えた。

次に異変が起こったのは、湊だった。

「お前……混ざっているな」

突然、背後から知らない学生に声をかけられた。

学内で見かけたことはあるが、話もした事が無いような相手だった。

「何の事だか」

思い当たる節はあるものの、とぼけてみせる。

「そうか……まだ目覚めていないのか……それなら私と共に行こう。

あのお方がお前の望みを叶えてくれる」

「悪いけど、宗教とか興味無いから」

「拒否は受け入れぬ。どうしても言うなら力づくで連れてゆくまで……！」

軽く流そうとした刹那、その学生の姿は一瞬にして魔のものへと変

えた。

一瞬驚いたものの、すぐに冷静さを取り戻して、身構える。

「血を継ぐもの…素質のあるもの…全て集めろ、との命令だ」

シューシュー、と、大蛇の威嚇音に似た音を発しながら、今にも彼を捕まえようと近づいてくる。

「この姿を見ても驚かない所を見ると、お前はかなり良いものを持っているようだな」

「誉められてもあんまり嬉しくないけどね」

「お前のような奴を連れて行けば、さぞかしお喜びになられるだろう…」

「悪いけど、俺はそっち側に行くつもりは無いんで」

「言っただであらう。お前に拒否権は無いと……！」

既に人間の形など微塵も残さない姿をした魔物が、大きな口を開けて襲い掛かってくる。

が、彼は避ける素振りなど見せずに、右手を翳しただけで魔物の動きを止めた。

「アイツの力、思ったよりも使いやすいな……」

ちよつと意外だったかのように湊が苦笑する。

「何故だ…何故ここまでの力が出せる……」

苦悶の表情を隠し切れずに、吐き捨てるように魔物が叫ぶ。

「企業秘密」

それだけ言っで、右手に力を入れ、放出し、魔物を彼方に吹き飛ばした。

「皇さんの特訓の成果、かなり出ているみたいだな……」

右手首を軽く鳴らし、湊はそのまま常盤家に向かった。

「とうとう動き出したな」

地獄とも言える修行で死んだように倒れている孫を尻目にTVを見ていた皇の表情が曇る。

流れている映像は、行方不明者続出と、凶器不明の殺人事件の数々だった。

日本、いや世界中で同様の事件が起きている。

それらの事件が、彼らに種を植えられ、行き場の無い黒い感情が増幅し、魔物へと姿を変えられた「元」人間の仕業だと解っている人間は、ほんの一握りしかいなかった。

そして、その報道中の、ほんの一瞬だけ流れた映像。

おそらく一部の人間にしか理解できない波動で流したのであろう。

3日後に。

たったそれだけの短い文章では合ったが、何を意味するかには充分であった。



## 7話

それは突然、魔物の襲撃から始まった。

世界中に散っているモノが照らし合わせたように攻撃を開始した。交通機関は一瞬でマヒし、TVすらともに写らない。

全ての人々が、今この瞬間、誰がどこで何をしているかなど解る筈も無く、またそこまで気が回る余裕すら無かった。

「お前たちだけは、我々でなければ齒が立たないらしいからな」

当然のようにこの土地に舞い降りた氷醒が不敵な笑みを浮かべる。

それは光栄な事と受け取っていいものか。

「闇狩主は我々にとつても大切な存在：大人しく渡した方がそなたたちのためでもある」

炎路が風に靡く髪を軽く押さえつつ窺める。

「どうせみんな死ぬんだからさあ、苦しまずに逝かせてあげるよ？」  
風堕が笑いながらクルクル回る。

「死にたくないんだつたら、堕としてあげてもいいんだよ？アタシ達の奴隷としてさ死ぬまで使ってあげるからさっ」

地叶がケラケラ笑ってお腹を押さえる。

「……お前たちの陣門に下るつもりもないし、彼女を渡すつもりもない」

微かに怯える汀を庇うように禅箭が前に立ち、答える。

「……交渉決裂か。まあ、それもある意味の美学ではあるな」  
予想通りだ、とでも言わんばかりに氷醒が身体の向きを直す。

「ならば、天地の理に従い、散るがいい」

弱きものが生き抜く方法は二つ。

強きものに従うか、己が強くなるか。

そのどちらにも行けない場合に残された道は、絶えるしかない。

「汀っ、下がれっ!!」

予め用意しておいた結界陣の中に彼女を押し込み、禅箭が構える。

彼女がそこに入ったのとほぼ同時に、彼らの攻撃が始まった。

「汀……動いてはいけませんよ」

結界の維持を任された雉祢が窘めるように言う。

「……わかってる」

少しでも彼らの援護をしようと、銀雪を降らせながら汀は戦いの行方を見守る。

それしか出来ない自分が齒痒かった。

「この結界は禅サマと皇様の力に、私の力を縫い含めて作られたもの……いくら彼等と言えども、そう易々と破られはしません。もし破られる時があるとすれば、私たちの誰かが敗れた時。……そのような事態に陥る事だけは避けたいものですわ」

「うん………」

都と、風墮。

湊と、地叶。

皇と、炎路。

そして氷醒には、禅箭が正面から立ち向かった。

\*\*\*\*\*

「アンタ、結構いい男じゃない。好みだよ」

舌なめずりをして、地叶が微笑する。

「アタシから兄者に頼んでやってもいいんだよ。んね、こっち側においでよ」

「遠慮させてもらうよ」

につこりと、爽やかな笑顔で湊が拒否する。

「どうしても？」

「すみませんね。ついでに、俺に色仕掛けは通じないから」

「つまんないなあ。じゃあ、死んでっ！」

大地が揺らぎ、無数の飛礫が湊に襲い掛かっていった。

「なんでボクの相手がこんな奴なんだろうね」

明らかな不満を前面に押し出し、風墮が膨れる。

『久しいですね、風墮』

2本の尾をゆらゆらさせながら、ゆつくりと都が歩み寄る。

「お前なんか知らないよっ！」

イライラしながらつむじ風を作り出し、都に向かって投げつける。

それをあつさりと躲し、音も無く地に降立つ。

『私は覚えていますよ』

「……黙れえっ……！」

その顔に、声に、風墮は微かに怯えを感じた。が、それを悟られないように再び攻撃を繰り返した。

「腕はもういいのか？」

左腕をわずかに庇う仕草を見逃す事無く、炎路が問う。

「お陰様でな。お前さんには丁度いいハンデだろうよ」

「……笑わせてくれる」

皇の物怖じしない様に、炎路の眉間に皺が寄る。

「ならば今回は全身余す事無く焼き尽くしてくれる……！」

両手を空に翳すと、その中心を渦巻くように巨大な炎の塊が出現した。

「骨一片も血一滴も残さぬ……消えるがいいっ！」

溶岩が波打つような紅の色をした瘴気が、猛スピードで大地に向かった。

「…粹な真似をしてくれるものだ」

汀が降らせる雪が少しは効いているのか、忌々しそうに降り続ける銀雪を見て、氷醒が呟く。

「あまり長引くと反ってこちらが不利になるかもしれぬ」

「長引かせるつもりはない。犠牲は最小限に収めたいからな」

今、自分たちがこうしている間にも、世界ではあらゆる事態が起き、犠牲者が増え続けている。

一刻でも早くこの場で彼等を倒し、散らばっている魔物を倒しに向かわなくてはならなかった。

勿論、その場には一族の人間が居るのだが、限度というものがある。数がわからない分、不安が募るばかりだった。

「あの結果…お前たちの予想通り、我等の力では解く事が出来ないようだな」

氷醒の言葉が、気味が悪いほどに耳に響く。

良く例えるならば、冷静。悪く例えるのであれば、冷酷・冷淡。

今まで闘ってきた魔物とも、隼末とも、先日訪れた風墮とも違う。

感じたことの無い、言いようの無い冷たい瘴気に、そのまま全身が凍りつきそうだった。

「お前は、今までどれだけ、我が同胞を葬ってきた？」

胸に手を当て、氷醒が禅箭に問う。

「聞こえが悪い言い方をするな。在るべき場所に還しているだけだ」

ろう」

ムツとした顔で禅箭が反論する。

「在るべき場所、か……確かにそうかもしれない」

幾ら自分が望まぬ場所でも、故郷は故郷。

いつかは戻らねばならぬ運命かもしれない。

しかし、永い時を暗闇で過ごしてきた者達にとって、この場所は理想郷でもある。

眩し過ぎるほどの輝かしい光が差し込み、落ち着いた夜が訪れる。

そしてまた陽が昇る。……朝が必ずやってくる。

永遠に暗いままの世界とは、違う。

「美しいな、ここは」

何かを悟るかのように、そっと目を閉じる。

「我々にとって、戻ると言う事は、地獄に落とされるに等しい行為なのだよ」

「それと、お前たちがこの世界を支配しようとするのと、どういう関係がある」

殺気を感じない彼の行動に戸惑いを隠せないながらも、訊く。

「ならば私はお前に聞きたい。我々とお前たち、どちらが世界を支配するのに相応しいと思う？」

「……………！」

「お前たちはこの世界の素晴らしさに目もくれずに何をしていた？この景観を損なう以外に何をした？自分たち以外のありとあらゆる生物を迫害し、滅ぼし。自分たちが世界を蝕<sup>むしば</sup>んでいる事に、どれだけの数が気付いていると思っている？我々がこの世界を支配するのと、お前たちがこの世界を滅ぼすのと何が違う」

「……………」

あくまでも氷醒の口調は、落ち着いたもののままである。

それだけに何か言い返せないものがあり、迫力があり、真実味が引き出されている。

「無意識のまま犯す罪というものは、それが罪だと気付いた頃には、

既に手遅れなのだよ。……我々は、自然の摂理に伴い、本能のまま生きる世界を築こうとしているに過ぎぬ。そのためにはお前たち人間を滅ぼすなり、我等と同等の、お前たちが蔑む獣以下の存在まで陥れる必要がある。そのための準備は既に整っているのだ。後は、お前のような余計な力を持つ人間を排除、余計な手間をかけさせないために闇狩主の器が必要なのだ」

「お前の言う事にも一理ある。それは認める。けどな、だからと言ってハイそうですかと受け入れられるほど利口じゃないんだよ、俺は」

額の印を全開にして、自分が持てる力をオーラに変え、全身に纏い、禅箭が構える。

それを見て、氷醒の表情が僅かに変化した。

やがてそれは大きな溜息と化し、嘲笑うかのように吐き出された。

「常盤の血筋も随分と落ちたものだ……その程度で私を止められるとも思っているのか」

「やってみなけりゃわかんねえだろ」

次の瞬間、禅箭の身体は大地を離れ、氷醒の眼前まで迫っていた。

――速い！

渾身の力を込めた拳は完全に隙をついた筈だった。

しかしその右手の拳は彼の左手に阻まれ、次に繰り出した左手からの気弾もあっさりと掻き消された。

「私に手を出させた人間はお前が初めてだよ……」

予想以上の攻撃をしてきた禅箭を、忌々しそうに睨む。

「やはりお前は最初の時点で消しておくべきだったな」

「……………」

最初。その言葉の意味が禅箭には理解できなかった。

「まだ気付かぬか？」

不敵な笑みをして、氷醒が改めて禅箭を見詰める。

そして発した言葉。

「お前と、両親が乗った車を襲うように命令したのは、私だよ」

お前が生き残ったのは予想外だったがな、と高らかに笑う。

身体中の血が逆流しているような気がした。

「禅っ、挑発だ！誘いに乗るな！」

皇の叫びも、既に彼の耳には届かない。

気がついた時には再び地を蹴り、怒りに任せて氷醒に向かっていた。彼が畏にかかった獲物を見下ろしたような表情をしていた事にも気付かずに。

鈍い音が聞こえた。

それが皮膚と内臓を突き破った音だと気付くまでにはそれほどの時間を必要としなかった。

赤い雫はすぐに溢れ、流れ出し、地に落ち泉となる。

貫かれた腹部だけに飽き足らぬかのように、口からも血液が流れ出す。

「他愛ない……所詮この程度か……」

右手は禅箭の腹を貫いたまま、自由な左手で彼の血を掬い、口に含む。

「……………っ！！」

先刻までの勢いは瞬時に消え、見る見るうちに苦悶で表情が歪む。

（ぬかった……）

血液が流れ出すのと比例するかのようになり、手足の感覚もマヒし、意識も薄れてゆく。

その薄れゆく意識の中で、霞んでゆく視界の中で、最後に映ったのは汀の顔だった。

ごめんな、汀。

約束を破る事になっちまいそうだ。

ずっと傍に居ると約束したのに。



## 8話

「禅サマあつっ!」

空をも切り裂くような雉祢の絶叫に、全員の攻撃の手が一瞬止まる。まるで映画のスローモーションを見ているかのように、禅箭の身体が鮮血を撒き散らしながらゆっくりと地に落ちる。それっきり微動だにしない。

降り続けていた銀雪がピタリと止んだ。

汀もまた、禅箭を見詰めたまま、動こうとはしなかった。

「奴等の攻撃の要は崩れた。この機を逃すな!」

静寂を破るように炎路が吠え、刹那、待ち構えていたかのように多数の魔物が現れ、一斉に牙を剥いてくる。

今、このような総攻撃を仕掛けられては、こちらの分が悪すぎる。

「仕方ない……退くぞ!」

この場での敗北を意味する、悲しい決断。

「でも、禅箭がつ……!」

地叶の爪を紙一重で避け、湊が叫ぶ。

彼までの距離が、とても遠いものに感じる。

ほんの数メートルしか離れていない筈なのに。

今戦っている相手と、既に身軽になっている氷醒を同時に相手する事は、今の自分には不可能だ。

（畜生っ……!）

現在の相手の攻撃に耐え、瞳の奥に熱いものが込み上げてくるのを堪えるのが精一杯だった。

「いいじゃん、どうせ皆同じ所に逝くんだからさあつ。早く会いに

行った方がアイツも喜ぶよっ！」

地叶の攻撃の勢いは、一向に治まる気配が見えない。

戦いが楽しいと言わんばかりの繰り出しに、かなり手間取っていた。炎路と風墮は既に自分からの直接攻撃は止め、部下である魔物にそれぞれの相手を襲わせていた。

まるで自分が手を下すまでも無い、とでも言うかのように。

都も、皇も、魔物を倒すのは造作も無い事だった。

しかし、数が多すぎた。

結界に、微かに輝<sup>ひび</sup>が入った。

このままでは破られてしまうかもしれない。

「汀……、私、出ます。ここから動かないでくださいまし」

戦いの行く末を見ていた雉祢がそつと言う。

彼女の耳には、まだ微かに鼓動し続ける禪箭の心音が聞こえていた。いつ止まるかもわからないほどの、弱弱しいものではあるが、確かにまだ脈打っている。

彼は、まだ、生きている。

まだ、間に合うかもしれない。

汀は頷くわけでも、何か声を発するわけでもなかった。

先刻と同じ体勢のまま、時が止まってしまったかのように動かなかった。

「……………」

少しの不安を残しつつ、雉祢は結界から出た。

瞬きするよりも速く、禪箭の傍に辿り着く。

「これはこれは雉祢様……、久しいですな。貴女の父上には随分とお世話になりましたよ」

氷醒が丁寧に挨拶をする。

それには目もくれずに、禪箭に擦り寄った。

（禅サマ……）

「あつれえ雉祢様、まさかソイツを助けるつもり？」

虫の息で横たわる禅箭を指差し、風墮が笑う。

「弟君が悲しむんじゃないのお？」

「黙りなさい」

弟、という言葉に反応し、静かな声で叱責する。

彼女の反応が楽しいらしく、風墮がはしゃぐ。

「これはあくまで私一人の判断。弟には何の責任もありません」

背筋を伸ばし、尾を高く掲げて言う。

「……由々しき発言だな」

沈黙していた炎路が溜息をつく。

「どうする兄者。コイツも殺しちゃう？」

瞳を赤く光らせ、風墮が問う。

「放っておけ。……どの道そいつは助からぬ。余計な力を使う必要

は無い。我々の目的は、あくまでも彼女だ」

そう宥めた直後、彼は汀が居る結界の傍らに詰め寄った。

「さあ、我々と来ていただこうか、闇狩主。鏡の『カケラ』を持つ

者よ」

「……かけら？」

汀が小さく聞き返す。

「貴女の中に在る鏡は、元はといえば我々の世界に、異次元への扉として置かれていたものの一部。鏡が完全な姿を取り戻せば、この世界と我々の世界との統合が図れるのです」

その鏡が完全なる姿に戻るのを恐れ、遙か昔に、自分たちでのみ、その欠片を形成できるようにしたのが、常盤の一族。

長い年月をかけてこちらの世界に入り込んできた魔物を、元の場所に戻す事の出来る人類唯一の道具。

それが魔物の手に渡ると言う事は、この世界に彼等が絶え間なく流れ込んでくる事を指している。

「そんな事のために……禅ちゃんがあんな事に……」  
「……？」

独り言のように、汀がポツリと言う。

突然、二人を隔てている結界の間の輝が広がった。

氷醒が何か手を下しているようには見えない。

（！？何故……禅サマの力が弱まっているから……？）

その輝の理由に確信が持てずに、雉祢が困惑する。

こうしている間にも禅箭の呼吸は、どんどん弱まってゆく。

更に、氷醒の邪魔をさせまいと、炎路と風堕が彼女の行く手を遮っていた。

『汀……っ！』

都が何とか彼女の傍に駆け寄ろうとしている。が、押し寄せる魔物にてこずり、思うように進めないでいた。

「許さないんだから……」

彼女を被うオーラが揺らめく。

「……」

彼女を結界から引きずり出そうとした氷醒の手が止まる。

「………湊くん、都っ！すぐにフルパワーで結界を張れ！雉祢っ、禅箭を頼む……」

<それ>が何を意味するのか逸早く察知した皇が、慌てて指示する。

「汀が……！」

「いいから、早く……！」

尋常ではない彼の様子に、妹の様子に焦りながらも指示に従う。

「つまらないなあ、もつと楽しませてよおっ」

結界に攻撃を阻まれた地叶が、悔しそうに地団太を踏んだ。

（儂の想像に間違いがなければ……恐ろしい事が起こる）

『我々にも、生きて帰れるという保証はありませんね』  
都が伏せ、雉祢が禅箭に寄り添うように結界を張り終えた直後に、それは起こった。

「許さない……絶対に、許さないっ!!」

汀の叫びに呼応するかのように、結界が粉々に砕け散る。

彼女を被い、限界まで膨張していた銀雪が一瞬にして吹雪となり、数千、数万もの雪粒が四方に一斉に飛び散った。

寸前まで襲い掛かってきていた魔物達が、次々にそれに貫かれ、溶け、消えてゆく。

断末魔の声が辺りに響き渡っているはずなのだが、全て吹雪に掻き消されていた。

目の前で繰り広げられる光景に、湊は寒気を感じた。

「これは一体……」

「……暴走したんだ。気を抜くとすぐに破られるぞ」

『無差別に攻撃しますからね……破れたら最期です』  
迫り来る雪飛礫<sup>ゆきつぶて</sup>を結界で跳ね返しつつ、都が補足する。

「フン、所詮ただの銀雪だろ。蹴散らしてやるよっ!」

地叶が不敵な笑みを浮かべ、汀に両手を向ける。

両の手の平を交差させた部分に、禍々しい、黒い光が出現する。

「愚かな……」

雉祢がその様を見て俯く。

「死んじゃえっ……」

黒い光玉を汀に向かって発射しようとする。  
が、それは出来なかった。

「……………あれ?」

そのままの姿勢のまま、地叶の身体は動かなかった。  
いや、動けないでいた。

頬に、手に、足に、彼女の背の黒い羽根にまで銀雪が襲い掛かり、

そのまま彼女を凍りつけようとしていたのだった。

「何……コレ………何なのよおっ!!」

そこで初めて威力を知り、絶叫する。

いくら足掻いてもそれは止まる事が無く、もがこうとすればその動きを察知した新雪に阻まれる。

既に身体の半分以上は凍りつき、僅かな動きすらできない状態にまで陥っていた。

「退くぞ」

撤退を命じたのは、氷醒だった。

「無事だったんだね、兄者 りょーかいだよ」

自らの結界で銀雪を避けていた風墮が、一足先に姿を消した。

「残念だな、地叶。お別れだ」

炎路もまた、妹に一瞥をくれた後に去ってゆく。

「相手の攻撃の本質を見抜けなかったお前の負けだ。悪く思うな」

禅箭達に対するものと何ら変わりのない、冷たい声で言い放ち、彼もまた姿を消していった。

「そんな……イヤだ、助けてよ………兄者……兄者あぁっ………

!!」

既に去った兄弟達に向けた叫びは、吹雪に虚しくも吸い込まれた。

そして次の刹那。すっかり凍りついた彼女を感知したかのように、

巨大な氷柱が彼女に襲い掛かり、そのまま全てを粉々に砕いた。

最期声をあげることもかなわずに。

目の前の敵は全て消えても、吹雪は続いていた。

『さて、我々はいつまで持ちますかね……』

都が他人事のように呟く。

既に限界は近く、いつ破られてもおかしくない状態だった。

破られた後にどうなるかは、目の前で見せられている。

「自我を取り戻せばいいだけだからな」

懷から1枚の札を取り出した皇が、結界からそれを放り出す。

銀雪を取り込むかのように膨らんだ式神が決めポーズを取った。

「禪箭の声は覚えているな。止めてきてやってくれ」

皇が告げるとカゲロウくんはガッツポーズを取り、吹雪の中心部へと足を進めていった。

カゲロウくんが吹雪の中に姿を消してからすぐに、ゆっくりと吹雪がおさまった。

『……おさまったみたいですね』

風が弱まったのを見計らい、都が結界を解く。

わずかな粉雪が舞っていたが、それもすぐに風に流され、消えてゆく。

「わしの機転が効いたらしいな」

皇が誇らしげに胸を張る。

「皇さん……」

空を見上げていた湊がふと、皇を呼んだ。

「なんだい？」

「カゲロウくん…飛ばされてますよ」

「は？」

最後の一片の風に流されて飛んでゆくカゲロウくんの姿は、その身体の小ささもあって、すぐに見えなくなった。

（すると、汀を止めたのは…！？）

雪煙と、砂煙が徐々に晴れてゆく。

それまで見えなかった中心部が露になる。

「禅サマ……」

雉祢の大きな瞳から、静かに涙の粒が落ちる。

既に動かない人影が、そこにはあった。

禅箭が、汀を抱きしめ、手を固く握った状態でそこに居た。

汀の放った吹雪は、幸か不幸か世界中に散っていた。

主に空を走ったソレは、そこを支配せんとする魔物を貫き、彼等をひるませ、撤退させるには充分だった。

人間側にも被害が皆無だったわけではない。

しかし、それ以上の被害が出なかったという事自体が大きな貢献だったと言えるだろう。

二人はそのまま病院に運ばれた。

一体、何をどうしたらこんな状態になるのか、と医者に訊かれた所で答えられるはずが無い。

既に飽和状態になっている病院に二人を押し込めるだけで精一杯だった。

汀は、恐らく力の使いすぎによる極度の疲労。

禅箭は、意識不明の重体。正直、いつ心臓が止まってもおかしくない状態だった。

「湊くん、少し帰って休んでいたらどうだい？」

恐らく隼末の力を使った副作用だろう。顔色の悪い彼を見て皇が促す。

「いえ……自分が居てもどうにかなるわけでもないって解ってはいますけど……ここに居たいんです」

「無理だけはしないでくれよ。君にまで何かあったらご両親に言い訳がたたん」

「……はい」

立っているのさえ精一杯だろうに。時折ふらつきながらではあるが、



しつかりとした返答を返した。

横浜の両親の無事は既に確認されている。一区切りついた所で一族の力を借りて連絡を取っていた。

連絡が取れた時は色々と言われたが、今は落ち着いていた。

「皇さんにだけは話しておこうかな……」

待合室のソファに腰掛けた湊が突如、ポツリと言いだした。

「何だろうね。儂が聞いてもいい事なら聞かせてもらうが」

隣に腰を降ろし、皇が微笑む。

それにつられるように弱く笑い、そつと口を開いた。

「俺と汀は、半分しか血が繋がっていないんですよ。……俺、母親の連れ子なんで」

「……………」

「昔はそんな事全然気にしていなかったんです。でも、5年前の出来事と、こっちに來てから知った事で、ちよつと考える事があったんですよ。で、自分なりに少し調べてみたんです」

元々、普通の人間には見えないはずの魔物が、自分には見えた事。隼末を体内に受け入れながらも、自我が残っている事。

そして、何よりも。

大学で会った魔物や地叶に「混ざっている」と言われたこと。

それらを統合して一つの結論が浮上してきたのだが、それを受け止めるのが怖かった。

「完全な答えが出されたわけではないんですけどね」

顔は笑っているが、声は微かに震えている。

「……それ以上は言わなくていい」

彼が自分の中で出した解答を自ら言い出す事の恐怖を察した皇が制止する。

「考えすぎると余計に疲れるぞ。いいから少し休んでいなさい」

「でもっ……………!」

それを告げようとした湊の身体から突然意識が遠のき、そのまま彼は倒れた。

そして数秒後に、ゆっくりと瞳が開かれる。

「隼末……お前は、知っていたんだな」

黄金色の瞳に向かって、静かに問う。

「知ったのは、コイツの中に入り込んでからだけだな」  
倒れた体勢のまま、天井を見詰めたまま呟く。

過去の戯れから生まれた、新たな生命。

このような形で再会するなど思ってもいなかった。

ましてや、誰がこの事実を明かすことができるものか。

自分のような、魔物が実の父親であると。

湊は結局、そのまま自宅で安静を取る事になった。

汀は数日もすると目を覚まし、その3日後には普通の食事を摂れるほどまでに回復した。

食欲は無いらしいが。

そして汀の回復を待っていたかのように、禅箭の容態が急激に悪化した。

みんな、どうしてそんなに騒いでいるの？

ねえ、どうして禅ちゃんちゃんの病室にそんなにお医者さんや看護婦さん

が集まっているの？

何か凄く焦っている声が聞こえるけど、何を言っているのかまではわからない。

人がたくさん居すぎて、禅ちゃんの顔が見えないよ。

「汀……起きていていいんですの？」

袖を引っ張られて、初めて汀が居る事に気付いた雫祢が驚く。

「雫祢ちゃん……」

袖を掴む手を震えさせ、禅箭の病室を見詰めたまま、汀が言う。

「禅ちゃん……大丈夫だよな？」

「……………」

雫祢からの返答は、すぐには無かった。

しばらく無言で居たかと思うと、まだ足元がふらつく汀を病室正面にあるソファに導き、座らせた。

「……こないいい女を二人も残して、あの方が逝ってしまうはずがありませんわ」

上からふわりと包み込むように、小柄な彼女を抱きしめる。

汀を包んでいる雫祢の腕もまた、震えていた。

『……何をしようとしているのですか？』

今まで見た事の無い法衣に着替えている皇に、後ろから都が話し掛ける。

「おお、都か。どうだった？湊くんの様子は」

浮かれている、とても表現すべきか。いつになく上機嫌な様子に、都が一瞬引く。

『あと半日ほどはかかるでしょうね。しかし驚くべき回復力です。人間にしておくのが惜しいくらいに』

先日の湊の告白を、都は聞いていなかった。

しかし、彼の事だ。薄々何かは感じているのかもしれない。

それを敢えて口に出そうとはしないだけで、実は全てを知っている

のかもしれない。

今はそのような事はどうでもいいのだが。

だから、二人ともそれ以上その会話については触れようとはしなかった。

『それで、私の質問には答えていただいておりますが……その前に報告がもう一つ。……… 禅箭の容態が悪化しました。もってあと半時程度かと』

「そうか。急がないといかんなあ」

孫への宣告を聞いても、病院に向かう素振りすら見せない様に、都の表情が変わる。

『……そのような事、喜ばれるとは思いませんけどね………』

彼が何をしようとしているのかを察したのか、促す。

「いいんだよ。ただの自己満足なんだから」

法衣の着付を終えた皇が、ゆつくりと顔を上げた。

「やっぱり死ぬのは、年の順じゃないと不公平だろうに」

その時、空に大きな星が流れた。

病室に嫌な電子音が響いた。

甲高く轟く、途切れる事の無い、魂の断末魔の叫びにも聞こえる音。

心拍停止。

医師と看護師たちの怒声にも似た声が響き渡る。

恐らく心臓マッサージを試みているのだろう。律動を繰り返す医師の姿が微かに見えた。

「嘘………」

雉祢がよろめき、背を壁にぶつけ、そのまま座り込む。

死ぬ？

誰が？

禅箭？

嫌だ。

嘘だ。

そんなの、信じない。

「禅箭の……ばかあつ……………！！」

汀の掠れがちな叫びが、涙と共に零れ落ちた。

指先からゆつくりと身体が冷たくなっていくのがわかった。

ああ、これで終わるのか。

こんな所で自分は果ててしまうのか。

汀の声が、遠ざかる意識の片隅に届いていた。

もし自分がここで死んでしまったら、誰が彼女を守るのか。

……駄目だ。自分はまだ死ねないのに。

しかし身体は動かない。

まるで死神が無理矢理鎌で切り裂いているかのように、彼の意識は肉体から離れつつあった。

死んではいけない、ではない。

生きたい。と願え。

ふと、彼を呼ぶ声がした。

昔からよく知っている、懐かしい声。

その時の禅箭には、その声の主が誰なのか理解できなかった。使命に捕われるのではなく、自分自身が生きるために、願え。自分の、ために？

そつだ。一族の柵に縛り付けられるな。

.....生きる。

お前を待っている、愛しい者達のために。  
そして、私達のために。

「.....？」

雉祢の動きが止まる。

彼を囲んでいた医師たちの動きも一瞬固まった。

先刻まで平行線でしか無かった脳波が僅かに波打つ。

そしてそれは微かなものから確実に大きなものへと変化していった。

「脈拍回復しました！血圧も上昇しています！」

看護婦が驚嘆の声をあげる。

奇跡だ、と若い医師が呟いた。

「この光は.....」

常人には見えない、彼を覆う眩いオーラに、雉祢が瞬く。

それは見る見るうちに輝きを増し、ついには視界全てを遮るほどに  
まで膨張した。

何が起こっているというの.....？

どこか温かみを感じるその光の中に何か不安を感じる。

その正体が掴めないまま、少しの時間が経過した。

光が落ち着くまでさほどの時間は必要とせず、またそれが終わった  
頃に禅箭がゆつくりと目を開いた。

その目尻からは、一筋の涙が伝っている。

驚く医師達を視界に入れようとせずに涙を拭い、呼吸器を自ら取  
り外し、身体を起こした。

「.....だっ、駄目だ！！まだ起きてはいけないっ！」

そのままベッドから降りた彼を、ようやく我にかえった医師が慌て  
て止める。

まだ調子が戻りきっていない彼の身体はすぐによろめき、医師の腕  
の中に倒れこんだ。

「禅ちゃん……」

「あんの……馬鹿野郎……」

朦朧とした意識の中の彼の呟きが何を意味しているのか、まだ誰も理解していなかった。

光に包まれた時に、完全とは言えないものの、彼の傷は殆ど塞がっていた。

治癒能力が急激に高まり、彼の怪我を癒してしまったらしい。

医師の中に一族の人間が居なかったら説明にかなり困難を極めていた事だろう。

生命の危機は乗り越えたと判断され、病室から人が引けるまでは色々騒がしかったが。

「良かったですわ……」

雉祢が椅子に腰掛け、一息つく。

「汀は？」

ベッドに横たわったまま、禅箭が訊く。

「少し疲れたみたいですわ…自分の病室で眠っています」

「そうか…悪かったな、色々と迷惑かけて」

「それは別に構いませんわ。……少しお休みになっては如何ですか？私、湊さんや皇様に報告しに行きますから」

「その必要はありません」

いつからそこに居たのか。都が会話に割り込んできた。

禅箭の表情が強張る。

「都……どういう事ですの？」

『湊は今眠っており、回復まではもうしばらくかかります。そして皇殿は……』

「死んだんだな」

突然都の話を遮って出された言葉に、雉祢が固まる。

「な……何を仰っているのですか禅サマ！」

『その通りです』

「!?!?……では、あの光はひょっとして……」

全て辻褄が合う事柄が揃った事に、納得と同時に大きな落胆が招かれ、膝を震わせる。

『常盤の力を全て禅箭に注ぐ事によって、彼を生き延びさせる道を選んだのです。常盤の力はそのまま生命力でもあり、また肉体でもあります。力を失った肉体はその姿を保つ事も出来ずに、そのまま消滅しました』

薄々と感じていた事ではあった。

常盤の力は、純血の人間に分割して分けられてた事を。

奏が死んだ時に、彼女が持っていた力が自分の中に注がれていた感覚があつたのだ。

そして瀕死であつた自分の治癒能力が高まつた事を考えれば、その結末は容易に想像できた。

『伝言……もとい、遺言を預かっています。……聞きますか?』

「……後で聞く。悪いけど、少し1人にさせてくれないか」

『…承知しました。では、私は汀の元へと参りますので』

「……では私は、湊さんの様子を見に行つて参りますわ」

禅箭の心境を察した二人は、足早に病室を後にした。

不思議な事に、涙は出なかった。

ただただ、思い出が頭の中を駆け巡るだけだった。

言いたい事は山ほどあつたはずなのに。

いざとなると何も出てこなかった。

喉の奥は熱いのに、言葉を発する事はできなかった。

今まで育ててくれた礼も言わせないまま逝っちゃうんじゃないよ。握り締めた拳から赤いものが伝つてゆく。



それと同じものを持つ人物は、誰も居なくなつた。

## 9 話

一連の事件から一週間が経過した。

禅箭の退院を待ってから皇の葬儀が行われる事になった。

しかし、彼の葬儀は公には執り行わなかった。

一族のほんの一部、本当の上層部の数人のみが弔問に訪れただけである。

勿論、からっぱの骨壺に向かって手を合わせに来ただけではない。

「我々全員、異論はありません」

喪服に身を包んだ老人が告げる。

「たった一人となられた純粹なる血を持つ貴方に、誰が異議など申し立てましょうか」

「それを聞いて安心した」

喪主の席から禅箭が静かに言い放つ。

「俺の考えは今言つた通りだ。………後は頼む」  
「承知」

「実際の所、どうなんだろうな」

人が引け、閑散とした部屋で禅箭が溜息をつく。

ゆくゆく定められていた事とはいえ、まだ高校生である自分が一族を束ねる事に、まだ不安があつた。

「弥史<sup>やふみ</sup>さんが言われた事ならば、まず問題無いでしょう。確かに貴方はまだお若い。しかし、素質は充分にあります。もっと自信を

持たれては如何ですか。そこに付け込む輩が出てこないとも限りませんよ」

「……わかつてる」

伊万里の言葉は確実に核心を突いてくる。

「言い方を変えましょうか？…貴方が、やりたいようにやればいいですよ。一族なんてただのオマケなんですから」

一族に関わる仕事をしている人間としてその発言はどうかとも思うが。

でも彼のその台詞は、禅箭を安心させた。

煩わしい手続き等は、全て伊万里が行った。

気がついた時には全て終わっていた。

「ねえ、伊万里さんって、どうしてそんなに禅ちゃんに尽くしているの？」

禅箭と同時に退院した汀が、休憩を兼ねたお茶の席で彼に訊く。

一族に、ではなく、禅箭個人に執着しているのは誰の目にも明らかだった。

「先代には私の人生全てを使っても返しきれない大恩がありますから。あのお方が寵愛あいづちされていた方に尽くそうとするのは至極当然の流れだとは思いませんか」

「へえ」

汀が素直に感心している傍らで、禅箭が「寵愛」という言葉に鳥肌を立てていた。

「先代以上の関係が築ければそれはそれで喜ばしい事でもあります。勿論、築きたいと思っておりますよ」

それを察したのか、禅箭に向かって満面の笑みを飛ばす。

「あとはこの書類だけでいいんだな？」

それを思いつき無視して、目の前に広げられた書類に目を通した。

「はい。ここここにサインを……」

そのやりとりの真つ最中に、不意に電話が鳴り響いた。

「悪い、汀。ちょっと出てくれないか」

「いいよー」

恐らく湊だろう。それを解っていた汀がパタパタと電話口に向かつていった。

十数秒ほど経過したあたりで、汀が戻ってきた。

「禅ちゃん、電話代わって」

手に持っていた子機を禅箭に突き出す。

「あれ？湊じゃないのか？」

「タカノさんって人。名前言えばわかるって」

「空野！？」

その名前を聞いた禅箭の表情が変わる。

素早く受話器を受け取り、保留を解除して話し始める。

「頼まれていた情報、入ったぜ」

電話口の向こうの相手は、それだけを静かに告げる。

「……そうか。いつ会える？」

「明日にでも」

「……わかった」

「葬儀に顔出せなくて悪かったな」

「気にするな。そっちの人間が知っている事自体がおかしいんだ」

「それじゃ、明日」

「ああ。ありがとうな」

通話を切った後、振り向きざまに禅箭が伊万里を呼ぶ。

「伊万里さん。悪いけど明日東京に飛ぶから、航空券用意しておいて」

\*\*\*\*\*

翌日の朝。禅箭は羽田に降りていた。

特に時間を告げておいたわけでもないのに、出口には見覚えのある顔があった。

「……学校はどうしたんだよ」

「お前が言っな」

対等に会話を交わす相手は、禅箭と同年齢の高校生である。

仕事絡みで知り合った彼は、数少ない禅箭が絶大なる信頼を寄せる相手でもあり、友人でもあった。

空野銀次<sup>たかのぎんじ</sup>

彼もまた禅箭と同じ、高校生を超越した力の持ち主であった。その力の類は彼のものとは異なったものではあるが。

「ホラよ、これが今回の資料」

伊万里が用意しておいたハイヤーの中で、銀次がA4サイズの封筒を渡す。

「へえ、随分とまとまっているじゃないか。見易いし。随分手間がかつたんじゃないか？」

打ち出された資料に目を通し、禅箭が感心する。

「さあ？作つたの俺じゃないし」

極秘情報にも関わらず、さらりと返答する。

「……おい。大丈夫なんだろうな」

「断っておくが、その資料の半分はソイツが取り出した情報だぜ」  
「……………」

全国屈指の実力重視超有名校の生徒がこんな奴ばかりで良いのだろうか。

まあ、いいんだろうな。銀次が通っているような学校だし。趣味でハッカーをしているような人間がいても何ら不思議は無い。

彼に頼んでいた情報収集。

少し前に起こった、恐らく氷醒達が関与していると思われる行方不明者のリスト。

また、その直後に起こった殺人事件の被害者と、行方不明者の関連。行方不明者が姿を消す前に関わった、共通する「あるもの」を探して禅箭はここにやってきた。

「最近聞くようになった新種の覚醒剤がある。それもおかしな話で、「金は取らない・売人に気に入られるのが条件」っていう、不思議なモノだ。しかも、手に入れた人間は誰も知らなかったりする。でも手に入れている奴は確実にいる。行方不明や惨殺事件が異様に増え始めたのもこの頃だ」

一番可能性が高いもの。

それを禅箭はドラッグと思っていた。

若者への浸透が深く、早く、それでいて闇の中で動くものとなると、思いつくものは限りなく少ない。

そして今見た資料と銀次の話で、それはほぼ確信へと変わった。

あとは、どうやってその売人に会うかだった。

そういった意味でも、彼は強力な助っ人だった。

「じゃ、とりあえず一番可能性のある所に案内してくれ」

「高くつくぜ」

「この後ラーメン奢る」

安い。

そう彼が思ったかどうかは知らない。

現地での情報収集は、予想以上にスムーズに進んだ。

何せ怪しい路地裏に入った途端にお約束的に不良集団が姿を現し、その内の1人が銀次の知り合いだったからだ。

まあ、知り合いというか、平たくしてしまえば彼の崇拝者である。絶対的なカリスマを持つ人間に従う事を己の喜びとする彼らによるネットワークは驚くほど早く、2時間も経過すれば十分な情報が得られた。

得られた情報は大きく分けて二つ。

界限を騒がせているドラッグの名前と、引渡し情報。

そして、次回その受け渡しの資格を得た人間の情報だった。

どうやら今回その資格を得た人間は1人ではないらしい。

確実な情報ではないが、それでも十分な収獲には成り得た。

あの兄弟の残り3人のうちの1人が、確実にこの事態に関わっている。

禅箭には確信があった。

腹部に残された決して古傷とは呼べない傷痕が疼いていた。

「おかえり、禅ちゃんっ」

帰宅した禅箭に向かい、汀が明るい声で出迎える。

「……なんているんだ？」

とてもいるとは思えない時間帯だったため、禅箭が仰天する。

「湊ちゃんが帰ってきてから少し休むって言ったから、邪魔しないようにこっちに來たの」

「イヤ、そういう話じゃなくて」

「迷惑？」

いや、だから、そうじゃなくて。

「都と雉祢は？」

「都はさつき、なんか用事があるとかで出かけた。今夜は帰らない  
つて。雉祢ちゃんは来てないよ」

「じゃあタクシー呼んでやるからすぐ帰れよ。終電間に合わなくなるぞ」

「大丈夫だよ。泊まるってメモ置いてきたから」

は？

彼女の顔は至って笑顔である。

黙って禅箭は受話器を手に取り、おもむろにボタンを押し始める。

「あ、もしもし、井上交通さん？常盤だけど、今から家の前まで……  
タクシー会社へとかけたはずの電話は「常盤」の「と」の辺りで切  
られた。

ふと見ると、汀が親機で電話を切っていた。笑顔のままで。  
ある意味怖い。

「……どういっつもりだよ」

「泊まるから」

彼女は一步も譲る気配が無い。

「お前なあっ……ジジイも都もないのに、そんな事できるわけな  
いだろっ！」

「どうして？」

「どうして……」

ストレートな疑問に答えは出ているものの、それを口に出せずに禅  
箭が口籠る。

「何かいけない理由でもあるの？」

あるとすれば禅箭の方だろう。

それを言ってしまうばどれだけ楽だろうか。しかし、今の彼にはそ  
れが言えなかった。



「それじゃ決まりだねっ。夕ご飯食べた？まだだったらスープ温めるよ」

「あ、じゃあ…貰う」

駄目だ。完全に彼女のペースに乗せられてしまった。

言ってから改めてそれに気付き、禅箭は頭を抱えて大きく溜息をついた。

「……あ、湊？オレだけど」

夕飯を済ませた上で、改めて電話をかける。

ちなみに、今からではどうあがいても終電には間に合わない。その旨を伝えると、

「ああ、わかった。今から俺も論文やらなきゃならないから」

いともあっさり了承を貰えた事に、てつきり怒鳴られると思っていた禅箭が拍子抜けした。

一瞬、隼末かと思ったが、声は確かに湊本人のものである。

「信じてるからな、禅箭」

やけに明るい声が返ってくる。おそらく受話器の向こう側には極上の笑顔があるのだろう。

最近のゴタゴタで思うように勉強が進まなかった事を危惧していた事を知っていたので、その嬉しさが現れていたのかもしれないが、この声は決してそれだけではないだろう。

その裏側に何が潜んでいるか、禅箭はよく知っていた。少しだけ背中が寒い。

「…大丈夫だよ……」

多分。

「湊ちゃん、電話出た？」

汀がチヨコチヨコと寄って来る。

「ああ。一応了解取れたよ」

「まあ、ダメって言われても帰れないんだけどね」  
コロコロと笑う。

果たして、コイツは今の状況がわかっていて笑っているのだろうか。  
「そうだ、禅ちゃん。今体調は大丈夫？」  
思い出したかのように、不意に汀がポン、と手を打ち、上目遣いで訊く。

氷醒から受けた傷の事を気にしているのだろうか。

その上目遣いにドキリとしたのを気付かれないように、禅箭が目を逸らす。

「別に悪くはないけど……」

「そう？良かった」

そう言うや否や、汀が禅箭の右の頬を平手打ちした。

パン、と乾いた音が深夜の神社に響いた。

あまりにも突然の出来事に、痛みよりも驚きが禅箭の脳に届いた。

「なっ……！？」

正気に戻るまで数秒。何するんだ、と怒鳴ろうとした禅箭の動きが止まった。

いや、止められた。

汀が、正面から禅箭に抱きついていていた。

「汀……？どうしたんだよ……」

頬の熱が上がるのに比例するように鼓動が早まるのを悟られないように、禅箭が訊く。

「……………怒ってるんだからね」

彼の胸に顔を埋め、曇った声で、汀が呟くように言う。

「怒ってるって、何を」

「ぜんぶ」

「全部って言われても……」

「今日出かけたことや、色々隠している事がある事」

「……………」

身体の傷と、心の穴も癒されないうちに禪箭が1人で出かけてしまった事が更なる不安と怒りを煽っていた。

「どれだけ心配してたかわかってない！いつも1人で決めちゃって……禅ちゃんやすーちゃんや湊ちゃんが良いと思って何も言ってくれないのだって、どれだけ私が疎外感感じていたかわかってないよっ！」

気がついたら、またひとつ、大切なものを失っているかもしれない。それが自分の無知故に起こった事かもしれない、と思ってしまうことが何より怖かった。

全てを知った上で動きたいのに、誰も何も教えてくれないのが歯痒く、悲しく、悔しく、そして自分の未熟さに苦しんでいた。

「私がまだまだ未熟だから、信用されてない事はわかるけど……」

「それは違っぞ。信用とかじゃなくて、お前の事を心配しているから……」

その言葉が汀の前半の言葉を肯定していることに気付いたときは既に遅かった。

汀がそれに気付いたかどうかは知らないが、更に心の奥底からの叫びは続く。

「話してくれなかったら同じ事だよ！心配ってなに？私がそれを知って苦しむから黙ってる！？ふざけないでよ！前にも言ったよね？黙ってるくらいなら洗い浚い話せて！」

忘れていない。忘れる筈がない。

汀を闇狩主として覚醒させ、一族の戦いに巻き込むための条件。

禪箭が何も言わずに離れてしまうことを怖れていた汀が発した言葉。全て包み隠さずに話せ。そうした上でこの戦いに巻き込め、と。

禅箭はそれに応じ、そして彼女の傍に居る事を誓った。

その約束を破ったのは禅箭だ。

何も言い返せずに閉口する。

置いて逝かれることの恐怖は、自分が一番よくわかっていたはずなのに。

今、それを彼女に感じさせていることに改めて気付かされ、激しい後悔が訪れる。

しばしの沈黙が流れた。

禅箭が汀の肩をそっと抱き、電話を手にとった。

良く知った番号を押し、相手が出るまで数秒。

「俺だけど。……………ごめん、もう駄目だ。全部話すよ……………」

「……………どうして」

「汀が、泣いているんだ。……………これ以上耐えられない……………俺が」

「……………そうか」

その一言で湊は全てを悟ったらしい。声は落ち着いたものだった。

「隼末には俺から話すから。……………うん、それじゃ」

「……………悪いな。嫌な役押し付けて」

湊の最後の台詞が、禅箭の胸に刺さった棘をそっと引き抜いてくれた。

「さあて、今から長い話になるぞ。徹夜するくらいは覚悟しておけよ」

電話を切った後、わざと明るく振舞い、汀の顔を引き上げる。

「徹夜は、イヤだなあ……………」

真っ赤な瞳で、明らかに無理をした笑顔で汀が応える。

「ただ、これだけは約束しろ。今から話すことは、全て俺たち周りの人間が、自発的にした事だ。その事に関して自分を責めたりは絶

つつ対にするなよ」

頭をわしわしと乱雑に撫でて、禅箭が強く告げる。

「……………わかった」

「よし。で、どこから話して欲しいんだ？」

「……………7年前から。禅ちゃんに起こった出来事全て知りたい」

聞きたくても聞けなかった事。

本当は、ずっと知りたかった。

禅箭が両親を亡くした時に起きた一連の事件。

皇との、思い出と言う名の様々な出来事の数々。

雉祢との出会い。

中学時代に死んだ同級生との関係。

そして、湊の中に住む隼末の存在。

全てを話し終った時、空は既に白み、雀の声が聞こえ始めていた。

中には、話したくない出来事もあった。

それでも、禅箭は話し続けた。

思わず耳を塞ぎたくなる事や、自らそれを口に出すことで吐き気を

催すような事も、全て、包み隠す事無く。

汀がそれを、望むから。

彼女は、話をしている間は何も言わなかった。

苦痛と言つ言葉では言い表せないほどの内容でもあった筈なのだが、

黙って禅箭の話に耳を傾けていた。

ただ、全てを話し終えた後の沈黙の中、小さく「ごめんね」とだけ

呟いた。

おそらく、言いたかった事の全てを凝縮した、精一杯の一言だったのだろう。

「それじゃ、俺は今から寝るから。適当な部屋で寝るなり帰るなりしろ」

幸か不幸か、今日は日曜である。

大きく欠伸をして、禅箭がベッドにもぐりこむ。

「一緒に寝てもいい？」

つられるように小さくあくびをした汀が訊く。

「アホ」

「……寂しいんだもん」

眠気からか、瞳を潤ませて見上げる。

「襲うぞ」

「いいよ」

「……やっぱり駄目だ」

「なんで」

「頼むから、もう少し自覚と危機感を持つてくれ」

「禅ちゃんなら構わないのに」

「だから、そういう台詞をサラリと吐くんじゃない」

全身からどつと力が抜ける。

果たして彼女は自分の言っている台詞の重大さをわかっているのだろうか。

大きな瞳をクリクリさせたまま、哀願する様に見つめ続けている。

……負けた。色々な意味で。

「……このベッド使え。俺は下に布団敷くから」

「はい」

「……………ねえ、禅ちゃん」

「なんだよ、眠いんだからさっさと寝かせろ」

「なんでそんなに端っこに寄ってるの？」

不自然なほど布団の端に身体を寄せている禅箭の姿に疑問を感じた汀が目を丸くする。

壁に付くかと思えるほどまでに、彼の身体は汀が横たわるベッドよりはるか遠ざかっていた。

「誰かさんが落ちてきても大丈夫のように空けておくんだよ」

「……………」

汀が間借りしているベッドには柵がついている。彼女の寝相が悪かったとしても落ちる事はまずない。

彼の台詞が何を意味するのか解った瞬間、汀は満面の笑みでベッドから転がり落ちた。

勢いをつけすぎて、落下地点が少々予測地点より遠くになった事は仕方ない。

カエルを潰したような禅箭の声が聞こえたが、それもまあご愛嬌ということだ。

「ごめんね。赤くなっちゃったね、ここ」

未だに少し熱を帯びる禅箭の頬を撫ぜ、汀が謝る。

「起きても腫れが引いてなかったら治すよ」

今は力を発動することすら面倒臭い。

それから間もなく、二人は深い眠りについた。

窓の外で小さな光が瞬いた事には気付く事もなく。

深い深い眠りへと誘われていった。

自分に残された選択肢は、果たしていくつ残っているのだろうか。

そのひとつは、今、目の前で消えた。  
朦朧と歩き始めた足取りは重く、それを振り払うかのように地を蹴り、宙を翔けた。

微かな気配を感じて、2尾の狼が顔を上げる。

既にその姿は肉眼では確認できないほど遠ざかり、戻ってくる事は無かった。

「……………」

口に含んだ氷を黙ったまま噛み砕き、都はその場を離れた。

見たくなかった。

たとえ解りきっていた結末だったとしても。

「どうされました、雉祢様」

夕闇に1人の影が浮かぶ。

氷の微笑を携えた青年が、そこに居た。

「氷醒……！」

あまりにも突然の出来事に、驚嘆の表情を隠せなかった。が、それもすぐに消えた。

「見張りをつけるなんて、いやらしいこと」

禅箭や汀には決して見せる事の無い、冷たい表情で一瞥をくれる。

「人聞きの悪い事を仰いますな。たまたま近くを通りがかっただけです」

まるで偶然とでも言わんばかりに、彼の足元に従う魔物の頭を撫ぜながら微笑む。

笑顔でありながら相手に温かみを感じさせないその表情に、背筋が寒くなるのを感じた。

彼の傍にいる魔物を、雉祢はよく知っていた。

「琴葉……………」



過去に自分に従う立場にありながら、姉妹のように仲良くしていた相手。

その瞳は既に輝きを失っており、まるで雉祢の事を忘れ去っているかのようにだった。

ただただ、氷醒に従うだけを全てとするように変えられてしまった、哀れな存在に成り下がっていた。

「もう、貴女で最後ですよ」

唐突に氷醒が言い放つ。

それが何を意味するのか、雉祢には痛いほど理解できた。

「これ以上、彼らに加担してどうなると仰るのです。我々闇魔と貴女方真魔は対を為すと同時に、同じ存在だったはず。人間と共存するために我々が邪魔だと思われあの地に封印されたのであれば、全ての原因を排除してしまえばいいだけなのではないですか？」

人間を滅ぼすと言う事は、全ての魔物が一緒に暮らせるという事だ。

「我々は、己を殺してまで共存しようと試みている仲間の心を解放したに過ぎません。まあ、多少強引な手段ではありませんけどね」

琴葉が呼応するかのように、差し伸べられた氷醒の手に擦り寄る。

「我々、いや、私には貴女が必要なのですよ。雉祢様」

「……それは私の立場？それとも私自身なのかしら」

「無論、両方ですよ」

そう言うのとそつと両の手を伸ばし、雉祢の肩に乗せ、そのまま彼女を引き寄せた。

彼女は抵抗する事もなく、そつとそのまま身を任せ、瞳を閉じた。

欲しいものがあった。それは今も変わらない。

そしてそれがどうしても手に入れる事が出来ない事も知っていた。

それならば、いつそのこと壊してしまえばいい。

さすれば、これ以上嫌なものを見なくて済むだろう。

自分の考えが短絡的であることくらい解っている。  
でも今の自分には、それを止める気力が無かった。

さあ、種を受け入れなさい。

そうすれば、貴女は自由になれる。呪縛から解き放たれる。  
望みのままに。思うように行動すればいい。

我々魔物の本能の導くままに………

## 10話

「お帰り」

既に夕刻と呼ばれる時間にマンションに着いた二人を、明るく出迎えた。

湊ではなく、隼未だ。

「……ただいま」

まだ見分けがつかないらしい汀が、少し迷いつつも言う。

「なんだよ、しけた顔してるな。折角俺が持つてる情報教えてやるうと思つてわざわざ出てきたのに」

「………どういう事だ？」

「ご丁寧に、湊が手紙残していてな。全部聞いたよ。まあ、約束破ったツケは後でキツチリ払ってもらうけどな」

「そんな事言わないで。私が無理矢理禅ちゃんに頼んだんだから」  
汀がすぐるような目つきで隼未を見据える。

「………」

それをしばらく見たあと、彼は無言で禅箭に向かって来い来いと招いた。

「……目エ瞑れ」

そう言つて彼の額に右手を翳すと、間髪入れずに衝撃波で吹っ飛ばした。

何も構えていなかった禅箭は、いとも簡単に壁まで飛ばされた。

「……ッ！！」

「禅ちゃんっ!？」

「安心しろ。これでも手加減してやったんだ」

背中に走った激痛のせいだ。それとも隼未の力の影響か。

そのまま禅箭は意識を失った。

頭の奥から、声が聞こえる。

これから、俺が持つ記憶の全てを、お前の脳に直接送り込む。  
いいか。この記憶は全て事実だ。

受け止める。目を背けるな。

「禅ちゃんっ、禅ちゃんっ！」

微動だにしない禅箭を揺り動かし、汀が叫ぶ。

「今は大事な情報を格納している所だ。下手に動かすとバカになるぞ」

タバコに火を灯し、隼末が言う。

「だからって、こんな事しなくても……！」

「その方が都合がいいだろ。お前にとっても」

煙を吐き出し、意地悪く笑う。

「どういうこと……？」

「忘れていいのか、忘れたフリをしているのかは知らないがな。お前の弱点であり、最大の強さ。お前を氷醒達に渡すわけにはいかなんだよ。その為にも、全てを自覚しておかなくてはいけない。お前自身も。そして勿論コイツも、な」

「……………！！」

汀の身体が微かに震え始める。

「己の弱さを自覚できない人間は、奴等に付け入られ、種を植えられる可能性がある。そしてその弱さは醜い願望へと変わり果て、やがて破滅させる。お前にそうなられたら困るんでね」

「困る」のではなく、「嫌」なのだが。

それは敢えて言葉には出さずに、汀の頭へと手を翳した。

「……………いや……………」

両の目から涙を流し、力なく頭を振る。

「耐えろ」

彼女の願いは隼末の右手から発せられた閃光に虚しく掻き消された。

克服しろ。全てを。

悪夢を無理矢理呼び起こされる前に。

膨大な量の、情報と言う名の歴史が、無理矢理頭の中に詰め込まれてゆく。  
拒む事を許さず、まるで楽しむかのようにそれは禅箭の脳を侵食していった。

頭の中を激痛が走り抜ける。

情報を収納しきれずにパンクしかけているのだろう。

今理解できるのは、闇の中に眠る一筋の光。

そして、その光の更に奥に潜む暗闇。

その全ての根底に眠る、ひとつの影の存在。

……俺は、コイツを知っている。

自分がそれを全て受け入れるには、まだ足りないものがあつた。

「……………」

ゆっくりと瞳を開ける。

まだ少し頭痛がしていた。

見慣れた天井に、ソファアの感触。

汀と、湊の住むマンションのリビングだ。

「随分と大きくなったんだな、禅箭。ここまで運ぶの大変だったぞ」  
湊が優しく話し掛ける。

隼末は既に眠りにについているらしい。

「……………で、禅箭。起きたばかりで悪いんだけど、ちょっといいか？」

につこりと微笑んだまま、湊がコーヒーを手に寄って来る。  
こういう表情の時は、とんでもなく怒っている場合である。

「汀が部屋から出てこないんだけど、何があっただ？」

返答によつては、湯気がモウモウとしているコーヒーをそのまま顔  
にかけられそうな勢いだ。

「なっ、何もしてない！第一、俺だっていきなり隼末に気絶させら  
れたんだよ！」

「…その前とかは？本当……………に何もしていないか？」  
「ううっ……………」

返答に行き詰まる。湊の顔からは笑顔は消えない。むしろ微笑み度  
が増しているようにさえ感じられる。

怖い。

「禅ちゃんのせいじゃないよ」

突然、扉の向こうから汀が割り込んだ。

「……………隼末に何をされたんだ？」

閉ざされた扉を隔てたまま、禅箭が訊く。

「何もされてないよ」

「嘘つくな」

「嘘じゃないもん。……………ぜんぶ、私が悪いんだから」

「どついう事だ？」

「汀」

ふと、静かに湊が妹の名を呼んだ。

汀からの返答は無い。

「隼末に何をされたか、言われたかなんて知らないし、どうでもいい。お前が納得するまでそこに居ることだって構わない。……ただ、欺き続ける事だけはするなよ」

扉の向こう側からは、明らかな動揺が窺えた。

やがて、ゆつくりと扉が開かれた。

「ごめんなさい……」

どれだけ泣いていたのか。真っ赤になった瞳から更に大きな粒を溢れさせ、汀が姿を現す。

「欺きつて…… どういう事なんだ？」

「ごめんなさい」

「謝るだけじゃわからない」

「……ごめんなさい」

「汀。俺が話してやつてもいいんだぞ」

やりとりに見兼ねたのか、湊が口を挟む。

汀は少し考え込んだ後、力なく首を横に振った。

「……わかった。……じゃあ、俺は部屋に行くから、何かあったら呼んでくれ」

その方がお前も話しやすいだろうから。

「ごめんね。卑怯だね、私……」

涙を拭って、汀の表情が更に暗いものになる。

自分ばかり、聞くことだけ聞いて、肝心なこと、自分のことは話さないでいた。

「……話したくないことなら、無理に言わなくてもいいんだぞ」

「それじゃ駄目なの。この事だけは禅ちゃんに知らせておかなくちやいけないって、隼末ちゃんが……」

言いたくない。

一番知られたくない相手だった。

言わないでいられれば、どれだけ幸せだっただろうか。

でもそれは所詮上辺を繕っただけであり、真実を受け入れる事ではなかった。

それを知っていたから、隼未はそれを汀に促した。

「私が、こつちに来た理由ね…本当は、違うの。湊ちゃんの身の回りの世話なんかじゃないの」

確かに、中途半端な時期ではあった。それを疑問に感じた時もあったが、然程気にすることでもないので敢えて聞かないで居たのだが。

「前の学校でね…私…」

「それ以上言わなくていい」

震えた声を絞り出す様子に耐え切れず、禅箭が汀を抱きしめる。

予想はついていた。それを本人の口から言わせる残酷さに、恨みさえ感じられた。

「ごめんね…ごめんなさい…でも、言わせて…」

禅箭の身体から伝わる温かさと震えを全身で感じながら、汀が瞳を閉じる。

そして、凜とした声でその言葉を発した。

「…犯されたの。」

「学校の先輩でね…帰り道で声かけられて…」

「だからっ！それ以上言うなって言ってたんだよっ！」

突如、禅箭の怒声が響く。

それに萎縮し、汀は黙り込んだ。

「……悪イ」

聞きたくなかった、それ以上。

聞いたが最後、自分が何をしてしまうか想像できてしまったから。

「…ごめんなさい」

「お前が謝る必要ないだろ。何も悪くないんだから」

「でもっ……」



「いいから、黙ってろ」

「……嫌いに、ならないで」

「アホ。誰が嫌うかよ」

嗚咽しつつ絞り出される彼女を宥め、落ち着くまで抱き続けるしかできない自分が齒痒かった。

泣き尽くして疲れたのか。それとも昨夜の寝不足のせいかな。

汀は落ち着くと、そのまま眠りについた。

「……悪かった。今まで黙ってた」

湊が妹を部屋に運んだ後、禅箭に改めて謝罪した。

「そそのかしたのは隼未だろ。湊が謝る事じゃない」

「……………」

やがて、湊が重々しく口を開いた。

汀の口から直接聞くよりはマシだろう、と。

「転校してすぐにお前と再会しただろ。それを凄く喜ぶと同時に、お前にその事を知られて、嫌われることを極端に恐れた。以前、言ってたよ。『闇狩主になる事は、自分の意思ではあるけど、ただのエゴだ』って」

離れたくない。突き放されたくない。

全てを話して傍に居て。

それは、そのまま自分にも当て嵌まる事で。

でも、自分のことはどうしても言えずに居て。

それでも、全てを知られてしまっても、離れない証のようなものが欲しくて。

「……………シヨックだね」

不意に、禅箭が呟く。

「禅……………。黙ってた悪かったとは思ってる。でも……」

「そっじゃなくて。知ったからって、そんな簡単に心変わりするよ  
うな男だっと思ってわれてた事が、だよ」

「……そっちなのか？」

湊が拍子抜けする。そして安堵した。

「どんな事があるうとも、アイツがアイツで居る事に変わりはないだろ」

「ああ」

「隼未だって、後でこの事が発覚して、俺たちの間に亀裂が入ることを恐れて進言したんだろうしな」

「まあ、そう思えば合点はいくな」

「ただ、それを汀本人の口から言わせたことはちよつと許せないけどな」

「……………」。

ふと、沈黙が流れた。

湊がそれに気づき、恐る恐る訊く。

「……ちよつと待て。まさかお前、知ってたのか!？」

「知り合いにお節介な情報屋が居るもんで」

汀が言いたくないなら敢えて聞き出そうとも思わない。ずっと言わずに居るなら、それでもいいと思っていた。

「なんだ、そうだったのかよ……」

大きくため息を吐き出すと、ちよつと待ってる、と言って湊は自分の部屋に行った。

数十秒後に戻ってきた彼の手に持たれていたのは、瓶とグラス2個。

「まあ、呑め」

「……………未成年に酒薦めるなよ」

すっかりグラスを受け取っておきながら、禅箭が苦笑する。

それからどうしたのか、詳しいことは覚えていない。

その頃、常盤家では電話が鳴り響いていた。  
やがて、買い換えたばかりの電話機は留守番メッセージの応答を開始する。

電子音の後に、数秒の間を空けて、銀次の声が録音された。  
「携帯電話くらい持てよな……………例の件、新しい情報が入った。とりあえず連絡よこせ」

\*\*\*\*\*

「頭痛エ……………」

ガングンする頭を押さえながら、学校へと向かう。

深夜に帰宅し、銀次に電話をし、それから雑務をこなしていたらあっさりと言が明けた。

休んでしまえば、どれだけ楽だっただろうか。

しかし、今日はどうしても抜けられない用事があった。

「……………どうしても、か…？」

職員室で、禅箭の担任が大きく溜息をつく。

「お祖父さんが亡くなったと聞いて、遅かれ早かれこうなると思っただけだな…」

「わかってるならさっさと受け取ってよ。こっちもヒマじゃないんだから」

退学願、と書かれた封書を差し出しながら、禅箭が言う。

「まあ、一応受け取ってはおくけどな。まだ保留にしておくぞ」

「戻ってこられる保証無いんだけど」

「それでも、だ」

「……………」

少しの間を置いたものの、封書を受け取り、引き出しにしまうのを見届けると、禅箭は深く礼をし、背を向けた。

「ちよつと待て、常盤」

扉に手をかけた辺りで、ふと呼び止められる。

「俺さあ、来年結婚するんだよ。式には来てくれよな」

照れ笑いをしながら手を振る。あまりにも大声だったため、他の教師の注目を集めていた。

「考えておく」

戻って来い、と暗に言われていることに禅箭は気付いていた。胸の辺りが少しだけ熱くなっていた。

「禅ちゃん、もう帰っちゃうの？」

汀が廊下で呼び止める。

「ああ。ちよつと雑用ができてな。今から東京行ってくるよ」

「また……？」

明らかに不貞腐れた様子で汀が呟く。

「ちゃんと帰ってくるから安心しろ」

「うん……」

自分が行ってはいけないことだと判断したのか、素直に頷く。

「ねえ、禅ちゃん。ひとつ聞いてもいい？」

「何だ？」

「都と雉祢ちゃん、どこに行っちゃったんだろうね……」

「……さあな」

『私ならここに居りますが』

「……うわっ！」

突然足元に現れた都に、二人揃って仰天する。

『……何か不都合でも？』

「いや、好都合だ」

まだドキドキ鳴っている心臓を宥めながら、禅箭が言う。

これで一番心配な、汀の安全が保証される。

『雉祢がここ数日、姿を現さないみたいですが……』

「そっなんだよね。どうしちゃったんだろうね？」

『……最悪の事態を考えておいたほうがいいかもしれませんね』

氷醒の手に落ち、眷属に成り果てた可能性がある。

「大丈夫だ。それだけはある得ない」

禅箭は断言した。

『…随分と自信があるみたいですね』

その根拠はどこからくるのか、とでも言いたげに禅箭を見上げる。彼はただ、微笑むだけだった。

「常盤禅箭さんですか？」

空港の出口で、突然彼に声をかけた少年がいた。

「そうだけど、あんたは？」

「オレ、真鳥鴻まとりこうって言います。銀次に頼まれて迎えに来ました。今日は道が混んでるからバイクを使ったほうがいいだろうって」  
駐車場に案内しながら鴻と名乗った少年は挨拶する。

「最近、物騒な事件が続いていまして。そのせいかどうかはわからないけど、交通機関がかなり混乱しているんですよ」

禅箭は促されるままにヘルメットを被り、導かれるままに後部座席へと腰を下ろす。

「飛ばしますからね。落ちないようにしてくださいよ」

不敵とも思われる笑みをこぼし、鴻はエンジンをかけた。

「…聞きたいことあるんだけど、いいかな」

ふと、かすかな不安がよぎったのか、禅箭が訊く。

「なんででしょう？あまりにもプライベートルな事以外ならオッケーですよ」

「……何歳？」

「今年で14です」

鴻は満面の笑みで答えた。

二輪免許取得は16歳以上。

「銀次ー、常盤さん連れてきたよー」

ぐったりした禅箭を尻目に、イキイキと鴻が呼ぶ。

高級マンションかホテルを思わせるエントランスのドアが開く。

ここは、れっきとした学校の寮である。

「それじゃ、オレはここまでなんで。507号室に行ってください」

深々とお辞儀をして、鴻は去っていった。

「あ、ありがとう」

それを言うのが精一杯だった。

「どうかしたのか？青い顔して」

「……………酔った」

ふらふらと部屋に入り、水を飲んでようやく一息をつく。

道中、何度死ぬと思ったことか。

「あいつの運転荒いからなあ」

「それをわかっていて迎えによこしたのかよ」

明らかに恨みがましい目をして睨み付ける。

問題はそれ以前にもあるのだが。まあ敢えて今はそれは問うまい。

「ちょうど今、打ち出しが終わった所だ。見るか？」

話題をサラリと逸らし、銀次がプリンターから吐き出されたばかりの用紙を差し出す。

黙ってそれを受け取り、目を通す。

「おい…ちょっと待て。今夜かよ」

「みたいだな」

そんなあっさりと言うか。

「他に必要そうなものがあつたら調べておくが」

「…いや、これだけで充分だろう。助かるよ」

「俺は行かないからな。領域が違いすぎる」  
「わかってるよ」

深夜の繁華街。

そのネオンの影に存在する闇の中の不穏な動き。  
それらの全てに神経を研ぎ澄ませ、確実に見つけ出す。  
当てにならない警察の目をいとも簡単に潜り抜け、浸透してゆくものを求めて。

その裏で嘲笑うものを燻り出すために。

見つけたっ！

「風墮アッ！！」

刹那、禅箭の音が風を切つて、彼の耳に届く。  
姿は多少変えてあるものの、間違いは無い。

少年は振り向き、多少驚いたものの、すぐに元の表情に戻る。

「……死んでなかったんだ」

つまらないなあ、と肩を竦める。しかしどこか楽しげだ。

彼の横には、一人の男性が座り込んでいる。

「ちよつと遅かったね。ちようど種を植えたところだよ」

虚ろな瞳をしていたかと思うと、その男性は突然悲鳴をあげながら倒れ、全身を痙攣させた。

そして、みるみるその姿を変貌させてゆく。

「よく見ておきなよ。これが、愚かな人間の末路だよ」

既に人としての原型を留めていない姿をうつとりとした瞳で見つめる。

「僕らはその醜い願望を解放してやるだけさ。己の器以上の、身の

程知らずな奴等は野性に戻ったほうが幸せだろうしね。……もう、人間の時代は終わらせるべきなんだ」

共存することが当たり前にならないのなら、支配してしまえば良い。邪魔をするものは、全て消してしまえ。

行け、という風墮の声に従うかのように、魔物への変貌を終えた元・人間が禅箭に向けて牙を剥き、襲い掛かってきた。

その争いは、すぐに終わった。

一瞬、と言っても大差無いだろう。

魔物はあっさりと崩れ落ち、首と胴体が全く違う場所に落ちた。

そして、それぞれの場所で体液が噴き出す。

「なっ……………！？」

その光景に驚愕したのは風墮の方だった。

「どうしてっ……………なんでそんなにあっさり殺せるんだよ！ソイツは元々お前と同じ人間だったんだぞ！目の前で見ていただろう！？それなのに……………」

「それがどうした」

僅かな返り血を拭い、禅箭が言い放つ。

「元が人間だったから、俺が倒せないとも思っていたか？」

「……………」

風墮が口籠る。

「そんな心配よりも自分の身を心配しろ」

両の拳に力を集め、禅箭が睨む。

にわかに、周りが騒がしくなってきた。

「ちっ……………」

風墮が忌々しげに舌を打ち、宙に身を浮かせる。

「今は兄者に戦うのを止められているんだっ。どうしてもやりたいなら、今度は樹海に来いよ！そこだったらいくらでも相手になってやるよっ……！」



そう叫び、そのまま彼は姿を消した。

樹海、とは言うまでも無く富士の麓にある青木が原の事だろう。そこに、彼らの本拠地があるに違いない。

「あ、禅ちゃん。おかえりっ」

マンシヨンに顔を出した禅箭を、汀が出迎える。

「……どうかしたの？」

暗い表情のままの彼を、心配そうに覗き込む。

「……人を……一人、殺してきた……」

倒れるように扉に背を当て、そのままズルズルと座り込む。

躊躇わなかったわけじゃない。

襲い掛かってきた時、彼にはまだ、ほんの少しだけではあったが自我が残っていた。

殺してくれ。

いやだ、死にたくない。

絶望と恐怖が混ざったままの彼を解放するには、苦しませずに葬るしかなかったのだ。

それしか方法が無かったとはいえ、末期の表情は忘れられないものであつて。

方法は一つだったとしても、それが最良の方法だったのかと聞かれると答えられなかった。

「……禅ちゃんは悪くないよ……」

汀は、そう言うのが精一杯だった。

「むしろ、そうしてもらって幸せだっただろうよ、彼は」  
湊がそつと言う。

よく似た境遇の彼だからこそ、共感するものもあるのだろう。

「そう思わないと、これからやっていけないんだろう？ お前の仕事は」

「……わかってるんだけどなあ……」

苦笑雜じりに吐き出されたため息は、僅かな時間ではあるが、空気を白く染めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8842j/>

---

白銀の挽歌

2010年11月17日10時28分発行